



心の歌を奏でて

— 婆娑羅 — (下)

芳田尚哉

「ふあああつ」

すっきりした目覚めだ。

横を見ると、キヨカはくうくうと寝ていた。

「幸せそうだな」

別に涎が垂れているわけでもないし、口を開けているわけでもない。ただ、幸せそうだな……
と思う。

「さて、ちょっとシャワーでも浴びるか」

ぐっすりと眠ったので、すっきりしているけど、シャワーを浴びれば、完全に眠気もなくなる
だろう。

普段はこういう事をしないのに、旅先で余裕があると、なんだかしたくなるんだよな。

キヨカを起こさないようにベッドから抜け出し、浴室に向かう。

浴室は少しひんやりとしている。きゅっと身が引き締まる感じだ。

脱衣所で服を脱いで、浴室に入る。

「すっげえ解放感」

広い浴室を独占しているのって、なんだかいいもんだな。

体をほぐしてから、シャワーを浴びる。

「うわっ、気持ちいい……」

ぱしゃぱしゃと体に当たるお湯が気持ちいい。

顔を向けて、顔をぶるぶるとさせて洗う。

たまらない。

朝からシャワーっていいな。贅沢な時間の使い方だと思う。

シャワーを堪能して部屋に戻ると、キヨカが体を起こしてベッドに座っていた。

しかも、布団を胸の所に当てている。

「トールちゃん、おはよう」

なんだ、これ。あからさまな格好しやがって。しれっとしてるけど、確信犯だろうな。

なので、その辺は無視。

「おはよう。ぐっすり寝てたな」

「それはトールちゃんだよ。夜這いを期待してたのに、なにもしてこないんだもん。夜更かし
しちゃったよ」

「……………」

なにを言ってるんだ？ こいつは、ずっとそんな事を考えてたのか。どうなってるんだ、こい
つの思考は。

さすがに無視できそうになかった。思わず反応してしまう。

「そんなのするわけないだろうが」

「するでしょ、普通」

言い切りやがった。言い切りやがったよ。

「どんな普通だよ」

「一般的って事だよ」

「……いやいや、普通はしないだろ」

「するよ。女の子と一緒にベッドだよ。隣に美少女が眠ってるんだよ。しかも、無防備なんだよ。これでももしないなんて、考えられないよね」

「だから、その発想をやめろって。そのうち、痛い目に遭うぞ」

「トールちゃんだからいいんだもん。っていうか、トールちゃんがヘタレなだけだよ」

「はいはい。わかったわかった。ヘタレでもなんでもいいや。とにかく、俺以外には、そういう事するなよ」

なんでもいいや。なにを言っても無理だろうし。

「うん。トールちゃんにしかしないよ」

にっこりと断言しやがった。つうか、俺にはするんだ。まあ、俺だけにならっか。無視すりゃいいだけだし。

朝から疲れるな。

「それはどうでもいいから、とにかく準備しようぜ」

「そうだね。お腹も空いたし、なにか食べに行こうよ」

そういや、腹が減ったな。

「じゃあ、着替えて準備ができたなら、どこか食べに行くか」

「そうだね」

ホントに元気だな。まあ、元気なのはいいけど。

「じゃあ、私もシャワー浴びようかな。朝シャンっていいよね」

「勝手にしろ。俺は一緒に行かないぞ。もう浴びたからな」

先手を打つ。

「うっ……。なんだか、先に言われるのって淋しいよ」

とかなんとか文句を言いながら、キヨカは浴室に向かった。

「覗いちゃダメなんだからね」

「わかってるよ」

「わかってないよ、絶対。覗いたらダメなんだよ。わかってる？ 覗くのはダメなんだよ」

「わかってるわかってる。覗かないっての」

そんなに念押しされなくても覗かないっての。どれだけ信用ないんだよ。

一緒に行こうって言ったり、覗くなっ言ったり……どっちだっの。

「ううっ……。伝わってないのか、わざとなのか微妙だよ。トールちゃん、朴念仁(ぼくねんじん)で鈍(にぶ)いからな……。鈍チンだもんな。真面目なのはいいかもしれないけど、真面目すぎるのは悪だよな……」

ぶつぶつとボヤいているが、基本的に無視だ。

なんだか、もうなにを言われてもどうでもよくなってきた。確かに、いい気分はしないが、なにをしても言われるわけだし。

「よいしょっと」

キヨカがシャワーを浴びている間、特になにもする事がない。ぼんやりとベッドに座っているだけだ。

「今日は……っと」

今日する予定の事を思い浮かべる。

今日は、これから西部(にしべ)雅子(まさこ)さんに電話して、会えるようなら会社にお邪魔して……。でも、回転寿司の仕組みについて訊かれても答えられないからな……。でも、店内の雰囲気だけなら伝えられるはずだ。見た事があるだけ、その点でアドバイスはできるかもしれない。細かな所は、この世界の人になんとかしてもらおうしかない。

「そういや、もし断られたらどうしようか……」

全然考えてなかった。

断られる事だってあるんだ。そもそも、そっちの方が確率として高いんじゃないか？ 完全に失念していた。

どれだけ、自分たちの都合中心だったんだろうな。

断られた時は……。

「そうだな……。やっぱり、この辺を探索かな」

手掛かりもない探索は、本当に雲を掴むかのようだ。

この辺りらしいのだが、この辺りにはビルや商店街などがあるだけだ。それに人も多い。

だったら、蟲(ベステート)がいればすぐにわかるはずだし、そもそも騒ぎになるはずだ。

そんな事になってないわけだから、蟲(ベステート)は姿を見せていないって事じゃないだろうか。

手掛かりもなし。そもそも、どんな姿なのかもわからない。

「確か、逢稀(あき)にいたのは……。なんだか、ぴよんぴよんと跳ねる小さいヤツと、でっかいヤツだったな」

大きさは全然違った。

「巨大怪獣みたいな感じだったら、すぐに見つかるのにな……」

そう考えてから、確かに見つけやすいけど、封印する時は大変だな……と思った。俺は変身ヒーローで、スーパーロボットがあるわけじゃないし、巨大化できるわけでもない。ただの大学生だ。

「すぐに見つかるかと思ったけどな……」

どこかですぐに終わると思っていた。

もちろん、封印しないといけない数を考えれば、一ヶ月で終わらせるには二日で一体を封印しないといけない計算だ。

そこまで順調にいかなくても、その倍くらいは……と、どこかで思っていた。

よく考えれば、最初の時だって、一週間くらい……いや、それで二体だから、三日で一体の計

算か。

それだと、一ヶ月半くらいで終わらせる事ができる。

この世界は、今日で三日目だ。それを考えると、なかなかハイペースだな……。

「でも、このくらいじゃないと、出席日数がな……」

講義をサボりまくるわけにはいかない。単位を落とすと、マジで留年が現実になってしまう。

できれば、夏期休暇期間中に終わらせたいものだ。それは、キヨカも同じはずだ。むしろ、あいつの方が夏期休暇期間が短いんだから、深刻なはずなんだ。

「今日中には、なんとか片付けないとな」

手掛かりもないのに、楽観的だろうか。

でも、このままじゃ、本当に一年くらい掛かってしまいそうだ。

「……………本当に覗かないんだ」

そんな事を言いながら、キヨカが浴室から戻ってきた。さすがにバスタオル姿じゃなくて、きちんと着替えている。

でもって、ほんのりと上気(じょうき)した顔は、膨(ふく)れっ面(つら)になっている。

「だから、覗かないって言ったろうが」

「……………女としての魅力ないのかな……」

なにか呟きながら、自分の胸に手を当てている。

ったく……なんだってんだ。

「ほれ。なんでもいいけどさ、とっとと朝飯を食べに行こうぜ」

あまりキヨカの相手をしていると、全く話が進まなくなってしまう。

とにかく腹が減った。

空腹だといふ考えも浮かばないだろう。

ハングリー精神が大切だって言われたりもするけど、本当にハングリーだとそんな余裕はない。やっぱり、そういう憂(うれ)いがあると、考える余裕はないものだ。

「トールちゃんは、もうちょっと目の前にある大切なものを、しっかりと見るべきだと思うよ。失ってから後悔しても遅いんだからね」

まあ、キヨカがなにか言ってるが、それよりも大切なのは飯だ。

「とにかく、チェックアウトして、どこか行こうぜ」

ベッドから立ち上がると、トロリーバッグを持って部屋を出る。

「トールちゃん、待ってよ」

キヨカも慌てて追ってくる。

「トールちゃん。もうちょっと、女の子は大切にしないとダメなんだよ」

「大切になって……。別にそういうつもりはないんだけどな……。ただ、お前の思考が変だから、付き合うのがしんどいだけだ」

「……それが悪いんだよ」

「はいはい。善処します。ほれ、行こうぜ」

キヨカはまだなにか言いたそうにしているが、諦めたのか、理解してくれたのか、とにかくな

にも言ってこなかった。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

チェックアウトを終え外に出ると、朝陽がキラキラしていた。

ふと横を見ると、生乾きなのか、キヨカの髪もキラキラトしている。

いやいや、別に見惚れてたわけじゃないぞ。

ホテルがある路地から、商店街などがある道に移動する。

時計がないので、詳しい時間はわからないが、街はすでに賑わいをみせている。商店街は、ほとんどの店が開店している。

思ったよりも遅い時間なのかもしれない。

そういや、昨日は見かけたスーツ姿の人たちはいないようだ。

さて、なにを食べようかな……。

店が開いてなかったら、昨日みたいに喫茶店でモーニングかと思っていたが、この様子なら他の飲食店も開いているようだ。

「キヨカはなにか食べたいものあるか？」

一応リクエストは訊いてやろう。

なんだか、朝から不機嫌だし、このくらいはしてやろう。

「そうだな……。朝からカレーとか食べたいな」

「カレー……だと？」

朝からってのは、なかなかヘビーじゃないか？ 朝からステーキとか焼き肉と言わないだけマシなのか？ でも、どっちにしるヘビーだろ。

「もうちょっと、軽めのものにしないか？」

なんとか別のものにならないだろうか。

確かに空腹だが、カレーという気分じゃない。

別に低血圧とかでもないから、大丈夫なのかもしれないが、朝からと考えるだけで胃が重い。

「ううん、カレーだね。うん、今はカレーの気分だよ。カレーカレー。カレー屋さんはどこかなあ」

キヨカの考えは変わらなかった。

鼻をくんくんとさせながら、商店街を歩いていく。

マジでカレーかよ。

まあ、カレー専門店でも、食堂やファミレスなんかのカレーでもいいけどさ。他に軽めのメニューがある店だといいな……。

るんるん気分になったキヨカは、すぐに商店街にある黄色い幟(のぼり)が目印の店を発見した。そこには、でかでかと「カレー専門店」の文字が。

「あったよ」

店の前でキヨカがぴよんぴよんと跳ねる。

マジかよ……。

「さすがに開店前だよな……」

さすがに今は昼前ではないだろう。俺の感覚だと、まだ九時前だ。そんな朝から開店しているわけではない。むしろ、準備中であってくれ。

「マジかよ……」

しかし、呆気なく俺の期待は裏切られた。

店の前に着くと、そのドアには「営業中」と書かれた木札がぶら下がっていた。

俺の希望は簡単に打ち砕かれてしまった。

「ほら、早く入ろうよ」

キヨカが先に店内に入る。

「あ、おい……」

どうしよう……。これでカレーに決定だ。引き返すわけにはいかないだろう。

どうか、カレー以外のメニューがありますように。

……………なんて、考えた俺が莫迦だった。ここはカレーの「専門店」なのだ。カレー以外があるはずもなかった。

案内された席に着いてメニューを見て愕然(がくぜん)とする。

さすがに種類は豊富で、一般的なビーフカレーや、ポークカレーにチキンカレー、シーフードカレーといったものから、カツカレーやエビフライカレー、唐揚げカレー、コロツケカレー、季節の野菜カレーや、ホワイトカレー、グリーンカレー、ココナッツカレーやスープカレー、カレーピラフにスープカレー、キーマカレーなどなど。全部で三〇くらいはあるんじゃないだろうか。

しかも、種類によっては、辛さを選べるらしい。一辛から一六辛まである。注意書きで「体調を崩されている方は、一〇辛以上はお控え下さい、なんて書いてある。どんな辛さなんだよ。

挑戦しても面白い……というか、記念になるかもしれないけど、食べれる自信がない。辛いのは苦手じゃないが、想像以上っぽくて無理だろう。

目安としては、三辛くらいが、一般的な辛口らしい。それを考えると、一六辛ってどんなだよ。本当に食べられるのか？ でも、メニューにあるくらいだから、食べられるんだよな。

ちなみに、メニューによっては、ライスかナンか選ぶ事ができるようだ。

「どれも美味しそうだな……」

キヨカは、目をキラキラさせながらメニューを見ている。

ちなみに、店内に客は俺たち以外にもいた。

既に、八つあるテーブルの半分は埋まっている。

店内に時計があったので見ると、まだ九時前だった。正確には、八時五二分。

この時間で、席が埋まっているのはどうなんだろう。この世界では普通なんだろうか。朝からカレーがトレンドなのか？

それにしても、その客の人たちの服装が、どこか派手なのは気のせいかな。男の人はスーツ姿なんだが、一般的な黒やグレーじゃなくて、赤っぽい色だったりととにかく派手な印象を受ける。もちろん、黒の人もいるのだが、中のシャツが派手だったりする。

一緒にいる女の人も、あの体にフィットしたドレスの人もいるし、胸元が開いた派手な服装の

人もいる。

見た目も黒髪ながらも、どこか派手さを感じさせる。なんというか、そういうオーラなのだ。この世界では、これが普通なんだろうか。

明らかに別世界だ。

いや、実際俺たちの世界とは別なんだが。

その人たちも気になりつつ、俺はなにを注文しようか考えていた。

「トールちゃんは決まった？」

向かいに座っているキヨカが訊いてきた。

「お前はもう決めたのか？」

「うん。ハンバーグカレーにするよ」

にこにこ笑顔だ。

ってというか、ハンバーグカレーね……。朝からよくがつつり食べられるもんだ。

「トールちゃんは？」

「そうだな……」

メニューを見る。

確かに、どれも旨そうだ。

そもそも、この世界に来て食べたものは、どれもこれも旨かった。

だとすると、かなり期待できる。

だが、これが昼間ならがつつり食べようと思うし、ちょっと珍しい感じのメニューに挑戦したり……なんて考えるのだが、朝という事もあって、躊躇してしまう。

「ビーフカレーにするか……。それとも……」

「トールちゃん、早く決めてよ。私、もうお腹ぺこぺこなんだよ」

「わかったよ」

キヨカに急かされて、俺も決めた。

「決まったぞ」

そう言うなり、キヨカが店員さんと呼ぶ。すぐに店員のお姉さんが来てくれた。

「えっと、私はハンバーグカレーで。トールちゃんは、なにに決めたの？」

「俺はカレーピラフをお願いします」

このくらいなら、まだ軽い方じゃないだろうか。どうなんだろうね。

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

と、店員のお姉さんは厨房に注文を告げる。

「楽しみだな……」

キヨカは足をぶらぶらとさせる。

「なんだかさ、旅に出てから、食事が楽しみでしょうがないね」

確かにそうだな。

「この世界ってさ、なんでも美味しいじゃない」

「そうだな。昨日もそうだったし、一昨日も……」

「やっぱり、世界が違うからなのかな。それとも、この辺りだけなのかな？」

「どうだろうな？ でも、地域でそれほど変わるって事もないだろう」

「そうだよね。デパートもそうだし、高級店ばかりじゃないもんね」

最初に食べた鮨(すし)は、さすがに高級だったものの、昨日は喫茶店とデパートと、普通の食堂だ。どう考えても、高級店という事はないだろう。事実、値段も手頃だった。

「やっぱり、この世界は、食べ物が美味しいんだろうな」

「そうだね。私たちに合ってるのかもね」

そういう考え方もあるのか。

俺たちの味覚にか.....。

「この世界に住むのも楽しいかもね」

「おいおい、冗談でもそれは.....」

「わかってるよ。でも、これだけ美味しいとさ.....」

「わかるけどな。でも.....」

俺だって、こんなに旨いものが毎日食べられるなら、この世界にいたいと思うさ。でも、さすがにそれはできない。

「トールちゃん、真面目すぎだよ」

「だから、俺だってそのくらいわかってるって。それに、俺も同じ事を考えたしな」

なんだか照れくさいっていうか.....。なんだよ。

「そうなんだ」

なんだかキヨカはご機嫌だ。

さっきは膨れていたかと思えば、今はこうだもんな.....。よくわからない。

「そういえばさ、今日はどうするの？」

唐突だな。

「今日は、西部雅子さんに連絡しようって言っただろ」

「そうだけど.....。私たちが行っても、邪魔になるだけじゃない？」

「わかってるさ。でも、役に立てるかもしれないし。そもそも、蟲(ベステート)の手掛かりがないいじょう、どうしようもできないだろう」

「そうだけど.....」

「とにかくさ、色々な事をしながら、この世界を知って、蟲(ベステート)が行動するのを待つしかないだろ」

「後手後手だよね」

「それを言うなよ」

それを言われると辛い。

どうする事もできないのは事実だ。

蟲(ベステート)が暴れるなりしてくれないと、俺たちはその存在を認知する事ができない。

しかし、暴れるにしても、こんな街中で大丈夫なんだろうか。

逢稀(あき)の時は、周りになにもなかったから、結構暴れられたけど、ここじゃそうはいかない

だろう。

建物だらけだし、人も多い。

もしかして、ファンタジー小説みたいに、闘う時は別次元というか、なにか不思議な力で誰もいない空間に……なんて、あるわけないよな。そんなファンタジーな事、あるわけないない。

……………って、俺たちの状況が既にかなりファンタジーか。

世界を移動してるってのは、普通じゃあり得ないよな。

だとすれば、そういうのもありなのか？

「トールちゃんには、なんの策もないみたいだから、私はそれに付き合っただけよ」

なんだ、その言い方は。

微妙に俺を莫迦にしつつ、きちんと自分もなにも思い浮かばないってのは棚上げされてるよな

。

「とにかく、今日はそういう事だから」

「わかったよ」

と、そういう話をしていると、注文したものが運ばれてきた。

「お待たせしました」

俺たちの前に、それぞれのものが置かれる。

「うっわぁ……美味しそう」

香辛料の香りが、食欲を刺激する。ずがんと胃に直接くる感じだ。

思わずごくりと唾を飲む。

「いい香りだよ……」

キヨカは、あの魔法のランプみたいな容器——グレイビーポートに入っているルーの香りを楽しんでいる。このグレイビーポートに入っているだけで、なんだか急に美味しそうに思えてくる

。

「離れていても、ここまで匂うな……」

かなりいい香りだ。

そして、俺の目の前のカレーピラフも、かなり旨そうだ。

湯気と一緒に、こちらも香辛料の香りがする。

香りが鼻から全身にいきわたり、口の中が唾でいっぱいになる。

「いただきます」

キヨカは早速ルーをライスに掛ける。

ダメだ。すげえ旨そう。俺もハンバーグカレーにすればよかったかも、なんて思ってしまう

。

「俺も食べるか」

いただきます、と手を合わせて、スプーンを持つ。

朝からヘビーだとか思ってたけど、こうして目の前にすると、軽くぺろりといけそうだ。

スプーンですくって、一口。

「はふっ……うっ……」

なんだ、これ。

口に入れた瞬間、口の中に香辛料が広がっていく感じだ。

舌はもちろん、鼻も刺激される。

まるで、香辛料が体に染み渡っていく感じだ。

「旨っ」

「トールちゃんのも美味しそうだね……」

そう言いながら、キヨカもハンバーグカレーを食べる。

「……………」

キヨカは目を閉じて、無言で口を動かす。

「お、おい、キヨカ？」

キヨカはゆっくりと首を振る。

なんだ？ 美味しくなかったのか？

いや、そうじゃなさそう。そんな感じじゃない。

「どうしたんだよ」

ごくんと飲み込んで、じっと俺を見る。

「トールちゃん、話し掛けしないで。喋ったら、この美味しさが出ていっちゃうよ」

真剣な顔で言われた。

「そ、そうか……」

なんだ。尋常じゃない眼力だ。

カレーを食べただけで、これだけの眼力かよ。

どれだけ旨いんだ、それ。

食べてみたい……と思いつつ、カレーピラフをもう一口。

「……………ああ、旨い」

やっぱり旨い。

二口目も、一口目に負けない衝撃だ。

ってというか、食べれば食べるほど、新しい発見がある感じさえする。一口ごとに、違う感じがある。

「トールちゃん、一口もらうね」

と、俺がカレーピラフの味に浸っていると、言葉と同時にキヨカがピラフを自分のスプーンですくって、ぱくっと口に入れる。

「あ、おい……」

「うわあ……。なにこれ。カレーピラフって、こんなに美味しいものだったっけ？」

止めるのも間に合わなかったが、その感想には同意だ。

別に、今までのカレーピラフが美味しくなかったわけじゃない。だがこれは、それらを全て不味いと言わせてしまうくらいなのだ。

「私が今まで食べてたのはなんだったんだろう？」

「……………ってというか、勝手に食べるなよ」

「いいじゃない。減るものじゃ……減るよね」

当たり前だ。食べられたら減るっての。

「しょうがないな……。トールちゃんも一口食べていいよ」

と、キヨカが自分の皿を差し出す。

およ？ なんだか珍しいぞ。キヨカが素直に分けてくれるなんて。

もしかして、こっちは口に合わないのか？ いや、それはないな。

「どれどれ……」

キヨカが注文したハンバーグカレーのルーをスプーンですくって、ぱくりと口に入れる。ハンバーグも少しもらおうと思ったが、キヨカに阻止された。

「……………なんだ、これ」

喋って損をした気分だ。

喋ると、口の中に広がった美味しさや、香りが逃げてしまいそうだ。

確かにこれは喋りたくない。

これは、かなり旨いぞ。

やっぱり、この世界は、食べ物が美味しい。

こんなルーは、初めて食べた。

他のメニューも食べてみたい。きっと、シーフードは明らかに味が違うんだろう。でも、他のトッピング系はどうだろう？ 組み合わせで、きっと違う味になるんだろう。

もう一口……と思ったら、

「一口だけだよ」

と、すぐに皿を自分の近くに戻す。

もっと食べたいが、さすがにそうはいかない。

俺はこのカレーピラフを堪能するとしよう。

口の中はもちろん、体中が香辛料の香りに包まれているかのような食事だった。

とにかく、すげえ旨かった。

おかわりしたくなるくらいだ。

っていうか、これを食べたせいで、余計にお腹が空いたくらいだ。この香辛料の香りは、危険かもしれないな。

「ねえ、ここって調合されたスパイス売ってるみたいだよ」

キヨカが店内にあるそれを見つけた。

レジの近くには棚があって、ここで調合した特製のスパイスが、小瓶に入れられて売られている。大きさは、掌(てのひら)くらいだろうか。遠目なのでよくわからないが、多分そのくらいだ。でもって、瓢箪(ひょうたん)みたいな形をしている。ちなみに値段は……一瓶五〇〇〇円か。結構するな。そもそもの相場はわからないし、この世界の物価の問題もあるんだろうが、こうして商品化されてる事だし、きっと売れているんだろう。

「ねえ、買っておこうよ」

キヨカが身を乗り出してくる。

「どうするんだよ。俺たち、自炊は基本できないぞ」

料理ができないというわけではない。俺だって、普段は自炊もしていたし、キヨカもできないわけじゃないだろう。

旅をしている都合上、調理できる環境にない事の方が多いだろう。

実際、今のホテル暮らしでは、調理する場所がないのでできない。

まさか、元の世界へのお土産って事じゃないだろうな。それもありかもしれないが、いつになるかわからないんだよ。まあ、香辛料だったら、腐ったりはないだろうけど、匂いがな……。荷物が香辛料の匂いになってしまいそうだ。

「そんなのわかってるよ。他の世界でならできるかもしれないし……」

と、小声になって、

「もしかしたら、他の世界で高く売れるかもしれないじゃない」

と、目を輝かせて言ってきた。

「もちろん、自分用にも欲しいけど」

なるほど……。

そういう発想ね。

そういえば、椎崎(しいざき)さんもそんな事を言ってたな。こいつは、それを覚えていたのか。それとも、商魂(しょうこん)たくましいのか。どちらにせよ、悪い話じゃない。

「そうだな。買っておこうか」

「さっすがトールちゃん。……ちなみに、買った分は、トールちゃんの鞆ね。服に匂いが移るのイヤだから」

「……………」

マジか。

そうくるか。

確かに、俺もそれは勘弁してもらいたい。

「お前もちょっとは持てよ」

「女の子の服が、カレーの匂いってというのは、どの世界でもよくないと思うんだよね」

「俺はいいのかよ」

「うん」

即答しやがった。

「……ったく」

これ以上は、なにを言っても無駄だろう。こいつは、最初からそのつもりだったんだろう。

でも、それを認めてしまう俺にも問題はあつたろうな。甘やかしすぎなんて、思われてもしょうがない。

「じゃあ、食べ終わったし、お会計しようか」

「そうだな」

と、キヨカがレジに伝票を持って、とてとてと向かう。

「すみません。この特製香辛料ってここにあるだけですか？」

レジにいた女性の店員さんに訊いている。

「まだ少し在庫はございますが……」

レジには、二〇ほどの小瓶が並んでいる。普通なら、これくらいあれば問題ないだろう。そのせいか、少し店員さんが戸惑っている。

「あと、どのくらいありますか？」

「えっと……少々お待ち下さい」

そう言って、厨房に入っていく。在庫を確認しているらしい。

「お待たせしました」

そう言って出てきたのは、シェフらしい男の人だった。

「こちらのスパイスの事でお訊(たず)ねとお伺(うかが)いしましたが」

「はい。このスパイスなんですけど、もうちょっと欲しいな……と思ひまして。もしあつたら、欲しいんです」

「それは構いませんが……。今すぐにご用意できるのは、全部であつ五〇ほどでしょうか」

「五〇か……」

おいおい、どれだけ買うつもりなんだよ。

五〇つつたら、二五〇〇〇〇円だぞ。それ以前に、すげえ量だぞ。それはこの先の旅の荷物としてどうなんだ？

俺たちは行商人じゃないだぞ。まあ、それに近い事をしようとしているわけだが。

ともかく、金額も量もおかしいだろ。

しかし、キヨカは結構真剣に悩んでいる。

「おい、キヨカ。そんなに必要じゃ……」

「じゃあ、あるだけ下さい」

俺が進言する前に言いやがった。

「おい、キヨカ」

「大丈夫だよ。旅の途中で、こんな美味しいものにせっかく出会えたんだよ。お土産にいいと思うけどな……」

「そうけどな。まだ旅は長いんだぞ。これって、結構な荷物になるだろ」

「そこはなんとかしようよ。大丈夫だって」

「お前も持つんだぞ」

「それはないね。頑張ってるね、トールちゃん」

「おいっ」

なんだ、この独裁は。

「あの……本当にお買い上げでよろしいのでしょうか」

俺たちが言い合っているからだろうか。まあ、いきなり全部買うなんて、おかしいと思うだろうし、そもそも俺たちみたいなのが、そんな金を持ってるとも思わないだろうな。

「買います。……ほら、トールちゃん、お財布」

「……って、俺の財布からかよ」

「当然だよ」

なんだろう、この当たり前の事を訊くなんて、莫迦なんじゃないの……って顔は。

「ちょっとは加減ってものをだな……。そもそも、まだ先があるってのに、ここでこんなに使っ
てどうするんだよ」

「大丈夫だって」

「本当にいいんだな」

念を押す。

「頑張ってるね、トールちゃん」

はあ～、とため息しか出ない。

「すみません。全部いただけますか」

「わかりました。少々お待ち下さい」

そう言って、シェフらしき人が厨房に戻っていく。

店内を見ると、俺たちはみんなから注目されていた。

当たり前か。

これだけ騒いでいたってのもあるだろうけど、スパイスを全部買うなんて、商売人くらいしかいないだろうし、生粋の商売人なら、こういう事はしないだろう。そもそも、俺たちはそういう風には見られていないはずだ。

しばらく待って、用意されたのは全部で六七。その数を目の前にすると、かなりの量だな。五〇で一箱に入るらしく、段ボール箱に詰めてもらった。残りは、割れないようにだけしてもらい、ビニール袋だ。

「すごいね……」

キヨカはただ感心している。

「袋はお前が持てよ」

「頑張ってね、トールちゃん」

またそれか。

とにかく、飲食分とスパイス代を支払う。

これで、一気におおよそ三四〇〇〇〇円だ。

こんな金額、振り込み以外でやり取りした事ないぞ。なんだか緊張する。こんなにお札を持ったのって初めてかも。

俺から札束を受け取った店員さんが、確認しつつ数えている。

すっげえ緊張する精算だな。疚(やま)しい事はなにもないんだが。

「確かに。ありがとうございます」

なんとか精算を終えると、ホッとする。

荷物を手伝ってもらいながら、トロリーバックにくくりつける。

キャストがなければ持てないくらいずっしりしている。

スパイスの瓶だが、しっかり密封されているようで、匂いは全くしない。そこはよかった。

しかし、想像していたが、やっぱり重い。

俺はずっしりとした荷物を持ち、店を出る。

「ごちそうさまでした」

荷物がないキヨカは、にこにこ挨拶していた。

お気楽だな。

「さあ、今日の予定をこなそうか」

キヨカは俺よりは軽いトロリーバッグを転がして、るんるんとスキップでもするんじゃないかという雰囲気、先を歩いていく。

「遅いよ。置いていっちゃうよ」

……重いんだっての。

ゴロゴロというよりは、ゴトンゴトンという感じで、のそのそとキヨカを追う。

壊れそうだな、これじゃ。そもそも、耐荷重は大丈夫な範囲だろうか。

「なあ、やっぱり買いすぎなんじゃないか？」

少し前を歩くキヨカに言う。

「大丈夫だよ。とりあえず、六つはお土産だよ」

「六つ？」

「うん。私とおじいちゃんと、神様と神様と一緒にいた人と、椎崎さん。それと、トールちゃんの分。一つは、旅の途中で使ったり、サンプルで味見してもらったりすればいいじゃない。で、残りは売る」

なんという計算。こいつは、セレクトショップでも始めるつもりなのか？ しっかりサンプルまで計算してるとは……。こいつ、こういうのが向いてるのか？

様々な世界で品々を集めて、それを売りさばく。

だが、それはそれで面白そうだな。旅の目的が変わってるけどな。でもまあ、このくらいの楽しみはいいだろう。

「ところでさ」

キヨカが急に立ち止まる。

「なんだよ。いきなり止まるなよな。危ないだろうが」

「それはトールちゃんが気を付ければいだけだよ。それよりも、連絡はしてあるの？」

「……………連絡？」

「そうだよ。アポイントメントだよ。アポなしは失礼だと思うよ」

「アポって……………あぁっ！」

忘れてた。

西部雅子さんへの連絡だ。

もう、行く気になってたから、すっかり連絡したつもりになっていた。さすがにアポなしで押し掛けるわけにはいかないよな。外出しているかもしれないし。

「忘れてたんだ」

キヨカが呆れた顔で俺を見る。

「しょうがないだろ。なんだか、朝から盛り上がり、忘れてたんだよ」

「言い訳は見苦しいぞ」

くっ…………。

「じゃあ、電話しようよ」

「わかったよ。……って、でもさ、携帯繋がらないだろ」

「公衆電話があるよ」

と、キヨカが指した先には、電話ボックスがあった。

「おおっ」

なんだか感動だ。

電話ボックスなんて、どれくらいぶりだろうか。本当に小さい子どもの頃は、街を歩けば結構見かけたけど、最近は全然見なくなったよな。まあ、携帯があるから、必要だと思った事もないけど。

こうして、携帯がなくなると、やっぱり必要だと思えるんだな。それだけ、社会が変わったって事か。

……………って、しみじみしてる場合じゃない。

「電話だったな」

電話ボックスでは、先客があったので、終わるまでしばらく待つ。スーツ姿の男性が、手帳を見ながらなにかを話している。

今なら携帯なんだろうけど、携帯がないとこういう風なんだな。移動しながらるのが無理だから、なかなか効率的にはいかないってわけか。

「電話ボックスって、すごく懐かしいね」

待っている間、キヨカが話し掛けてくる。

「そうだな。俺たちの世界じゃ、もうほとんど見ないよな」

「そうだね。公衆電話もないよね。どこにあるのかわからないよ」

「そうだな……どこにあるんだろうな。駅とかはありそうだけど……」

「ありそうだけど、どこにあるんだろうね」

普段、駅を利用していても、公衆電話なんて意識した事がないから、どこにあるのかわからない。でも、そういう公共の場所だったらありそうだよな。あとは……ショッピングセンターにもある……のか？ 本当にわからなくなってしまっている。ほんの数年で、ここまでなるんだ。

つまり、それだけ需要がなくなったって事だよな。携帯電話の普及と公衆電話の衰退ね……卒論で書けそうな内容だな。

そんな事を考えていると、先に利用していた人が出てきた。

「トールちゃん、ちゃんと連絡してよね」

「わかってるって」

なんだか緊張してきた。

そういえば、公衆電話なんて使った事あったっけ？

子どもの頃は、利用する事なんてなかったし、使うような頃には、携帯が普及してたから、利用する機会がなかったのもあるな。

財布から小銭を取り出す。一〇円玉を財布から取り出す。

この行為が、すごく新鮮だ。

そういえば、テレフォンカードなんて、コレクションアイテムみたいなもので、実際に利用ってした事ないや。

緊張しつつ、教えてもらった番号に掛ける。

何度目かの呼び出しがあり、相手が出た。

『お電話ありがとうございます。蛭原(えびはら)総合企画でございます』

と、女性の方が電話に出た。

「もしもし、京極(きょうごく)と申しますが、西部さんはおられますでしょうか」

会社に電話するってないから、心臓がバクバクだ。

『西部でございますね。少々お待ち下さい』

そう言うと、保留音が流れる。某、羊の音楽だ。どこの世界でも……っていうか、この世界にも同じ曲があるのか。

『もしもし、お待たせいたしました。西部でございます』

しばらく待たされた後、ようやく西部雅子さんが電話に出た。

「突然すみません。先日、回転寿司の……」

と、説明しようとしたら、

『連絡くれてありがとう。連絡したかったんだけど、連絡先はないって事だったし。とにかく、これから来れるなら来て欲しいんだけど』

先に招待されてしまった。

それにしても、なかなかハイテンションだな。

「わかりました。お伺いしてもいいか、確認しようと思っていましたので、これから……あ、でも、すみません。俺たち、この辺の土地勘がなくてですね……」

俺たちは、この世界の住人じゃないので、住所を見ても、どの辺りなのか。そもそも、ここがどういう街なのかもわからない。

『そうね……今はどの辺り？』

だから、それがわからないんだっての。

わかりません、と言おうとして、公衆電話に住所らしきものが書かれているのを発見した。

「えっと……」

そこに書かれている住所を告げる。

『なるほど。あなたたち、まだあの辺にいたのね。そこからなら、そんなに離れてないし、なんならタクシーで来て。そうしたら迷わないだろうから』

「わかりました」

『じゃあ、待ってるわね』

そう言って、電話を切られた。

嬉しそうな声だったな……。

受話器を置いて通話を終える。

「どうだった？」

ボックスから出ると、キヨカが訊いてきた。

「なんだか、大歓迎っぽい。むしろ、来て欲しいって言われた」

「そうなんだ……。じゃあ、行こうか」

そう言うなり、キヨカは歩き出す。

「おい、どこ行くんだ？」

「どこって、西部雅子さんの所でしょ？」

なにを訊いてるんだ、こいつは……なんて顔で言われた。

「どこなのかわかってるんだろうな」

「そんなの、トールちゃんが知ってるんでしょ」

さも当然という風だ。

「俺も知らないっての。つうか、この世界の地名なんて、わからないだろうが」

「でもさ、私たちがいた世界と、あまり変わらない気がするよ。知ってる名前だし」

そう言って、キヨカは電信柱を指す。そこには、確かに地名のプレートがあった。そこに書かれている地名は、確かに俺も知っている。

改めて名刺を見ると、小さく書かれている住所は、俺も知っている場所だ。確かに、ここからそれほど離れていない。俺が知っている世界と同じなら、電車で五駅離れているだけだ。乗り換えはないから、迷わないだろう。

しかし、書かれているビルの名前はわからないので、そこから迷いそうだ。

「電話したら、タクシーを使えばと言われたんだがな」

「それは楽だよ。でも、お金掛かるよ」

「そうだな」

確かに電車に比べれば割高だ。節約していかないと、ただでさえこんなものを……って、そうだよ。このくそ重たい荷物があったんだ。ずっとこれを持ち歩かなきゃいけないのか。だったら、タクシーの方がいいな。

「そういうわけだから、とにかく駅に行こうよ」

キヨカはすたすたと歩き始める。

「お前、だからどこかわかってるんだろうな」

「くどいな。トールちゃんがわかってれば大丈夫だよ」

「……だったら、先に行くなよな」

「いいじゃない。駅まではわかるし」

そうだな。昨日の出勤ラッシュのお蔭で、駅の場所はわかっている。

「ほら、行くよ」

しょうがない。

ゴトゴトと重いトロリーバッグを引いて、キヨカの後についていく。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

目的の駅は、俺が知っているのと同じ路線だった。路線図で確認すると、わかる範囲では、俺が知っているものと同じだったので、この世界はどうやら元の世界とかなり似ているらしい。

これなら、駅までは迷わずに行けそうだな。

券売機は自動だったが、自動改札でなかったの、駅員さんに鍵をいれてもらう。

「うっわぁ……なんかすごいよ」

キヨカがやたらとはしゃいだのが恥ずかしかった。

正直、俺もはしゃぎたい気持ちだったが。

しかし、この光景は、余程田舎から出てきて、都会に驚いているとこの世界の人たちには受け取られるのだろう。実際は逆なんだがな。ここよりも発展した世界をしているの、こういうレトロな感じが新鮮なのだ。

どう受け取られてもいいわけだが、とにかくはしゃぐのはやめて欲しい。気持ちはよおくわかるけど。

電車もどこか懐かしい感じがしたが、俺たちの世界とそれほど変わっていない。

電車内の吊り広告は、やっぱり違う世界のものだとなんでも面白い。

時間が中途半端なのか、比較的空いているが、それでも座れずに立つ事になってしまっている。

吊り広告を見ながら、あっという間に目的の駅に着いた。

電車を降りて、改札で駅員さんに切符を回収され、外に出る。

「あまり変わらないね」

そこは、小さなビルが建ち並んでいて、いくつか商店が並んでいる。

駅前といえば、やはり商店街らしい。

どちらかといえば、商店街は小さな規模だろうか。ビジネス街というほどでもないのかもしれないが、そういう感じがする。

「さて、どこだろうな……」

駅からどう行けばいいのかわからない。

どうしようか迷っていると、駅の近くに交番を見つけた。

「キヨカ、あそこで道を訊こう」

「あ、そうだね」

俺たちは交番で道を訊いて、教えてもらった方向に歩いていく。

教えてもらった通り、二つ目の信号で向かいに渡り、そのまま真っ直ぐ。

すると、名刺にあるビルを見つけた。

六階建ての雑居ビルのように、窓には色々な社名が書いてある。

目的の蛸原総合企画は、三階から六階らしい。名刺には、四階と書かれているので、西部雅子さんはその階にいるという事だろう。

階段を見つけ、四階まで上る事になる。エレベーターなんてものはなさそうだった。

トロリーバッグを引いての階段は、かなりの重労働だ。しかも、普段の荷物以外に、香辛料の瓶が……。

「キヨカ……ちょっとは手伝えって」

「なに言ってるの。頑張りなさいよ」

わかっていたが、どうやら手伝うつもりは皆無らしい。

仕方ないので、重い荷物を一段ずつ持ち上げる。なにせ、割れ物なので丁寧に運ばないといけない。

キヨカはキヨカで苦戦しているが、俺の比じゃない。踊り場で俺を見下ろしている。

「早く行こうよ」

「はあ……はあ……。だったら、てつ、だえって……」

喋るのも億劫だ。そんな無駄な体力を使ってられるか。

「頑張れ、男の子」

巫山戯(ふざけ)るなよ。

かなりムカついたが、そんな事をするのも体力の無駄だ。

「ほらほら」

無責任だな。完全に他人事だし。

どのくらい掛かったかわからないが、俺の感覚では二〇分くらいだろうか。ようやく二階に到着した。

二階に着く頃には、体力が尽きてしまった。ぺたりと座り込む。

「トールちゃん、だらしないぞ」

覗き込むように見られると、腹が立ってきた。しかし、相手をする体力はない。

まだこれを二回は続けられないといけないのか……。

この以上は、もっと時間が掛かるだろう。一階上がるのに、一時間は掛かりそうだ。

「早く行こうよ」

「無理……。休ませてくれ」

「トールちゃん、ヘタレだよ」

無茶言うな。こんな重いもの持って、階段を上がるなんて、誰でもこうなるっての。

そうして休んでいると、上の階から軽快な足取りで誰かが降りてきた。

「あら、あなたたち」

それは西部雅子さんだった。

「もうそろそろかと思って来てみたら……。どうしたの？」

階段の所でへばっている俺を見て、不思議そうに声を掛けられる。

「トールちゃんが、ここで力尽きちゃって。本当にだらしないんだから」

キヨカが端的に説明してくれる。

「その荷物で上がろうとしてるんだ」

西部雅子さんが、俺のトロリーバッグを見る。

「重そうだし、誰か呼んでくるわね」

そう言うと、上に戻っていく。

「トールちゃんがだらしがないのが悪いね」

「誰でもこうなるって」

しばらくして、西部雅子さんが二人の男の人と一緒に戻ってきた。

「お願いできますか」

それに了解と答えて、男の人たちは、俺のトロリーバッグを持つ。

「うわっ。思ったよりも重いな」

「よくこれを持って、ここまで上がってきたもんだ」

そうでしょう？ 重いでしょ？ それを一人でここまでですよ。

さすがに二人で持てば大丈夫だよな。二人は、前後になって先に上っていく。

「ありがとうございます」

もう力が入らない。

「じゃあ、あなたたちも行きましょうか」

「はい。トールちゃん、私の荷物よろしくね」

と、自分のトロリーバッグを俺に押しつける。

「彼、かなりつらそうだけど？」

「大丈夫ですよ。これくらいできないと、ただの役立たずですから」

酷い言われようだ。

ちくしょう。

キヨカのトロリーバッグを支えにして立ち上がる。

「うっ」

力が入らずよろけてしまう。

おいおい大丈夫か……と、上の方から声を掛けられる。

「はい、大丈夫です」

とは言ったものの、あまり大丈夫じゃない。

本気で足に力が入らない。

無理に立とうとすると、膝が笑ってしまう。

こりゃ、相当重症だな……。

「彼、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。この程度でダメなら、この先もダメでしょうから」

西部雅子さんに笑顔で答えてやがる。

そりゃ、俺もそう思うけどな。思うけど、思うだけじゃダメだって事だ。

鍛えが足りないのか？

でも、じいさんの所で、少しは勘を取り戻したと思うんだけどな……。それでも、サボってた時期があるだけ、足りてないんだろうな。

こんな状態の時に蟲(ベステート)が現れたりしたら……。

考えるだけで寒気がする。

頼むから、今は出てくるな。おとなしくしてろよ。

「トールちゃん、本当にダメダメさんだね」

キヨカが戻ってきた。

「こんなんじゃ、私を護れないよ」

「……すまん」

真剣な顔で言われたら、茶化すなんてできるはずがない。しみじみ、俺って情けないな。本当に、こんなんじゃ、キヨカを護るなんてできやしない。

なんのために俺はいるってんだよ。

……とは思うものの、こうなったのはキヨカのせいだ。

あの重さは、明らかに異常だ。

それがなければ、こんな状態になっちゃいない。

「ほら、手伝ってあげるから」

キヨカはひょいとトロリーバッグを持つ。

「頑張れ、男の子」

ぽんと肩を叩いて、自分だけ上っていく。

元々、それはお前の荷物だろうが。

そんな文句を言う元気もなかった。

「よいしょっ」

膝に手を置いて、ゆっくりと立ち上がり、階段の手すりにもたれかかるようにして、ゆっくりと階段を上っていく。

こんなにボロボロになったのって、いつ以来だろうな。

……………いや、じいさんに鍛えられてた頃は、しょっちゅうだな。ちょっとは加減しろって思ったね。

這々(ほうほう)の体(てい)で上ると、腰に手を当てたキヨカが待っていた。

「遅いよ。遅すぎる」

その罵声(ばせい)に押されて、階段を転げ落ちそうになった。

「彼も頑張ったみたいだし。あなたの荷物は、この事務所に置いてるから。さあ、入って中で休んで」

西部雅子さんの言葉が身に沁(し)みる。

「すみません」

もう、這(は)っていく体力もない……ってというか、その方が体力を使うよな。

ふらふらと、なんとか倒れる事なく中に入った。

中は意外と簡素な感じがした。

パーティションで仕切られていて、全体を見渡す事はできないが、数人が忙しそうにしているのはわかった。

「こっちょ」

と、奥の方へ案内される。

それぞれのデスクは、かなり散らかっている。

まさに、俺的イメージの仕事場って感じだ。

「ちょうど、あなたたちに意見を訊こうと思ってたのよ」

そう言って案内された場所には、なにやら模型があった。

それは、楕円形をしていて、長いベルトコンベアのようなものが、急カーブになる部分以外の円周上に設置されている。つまり、二本のベルトコンベアのようなものがある。

「これなんだけどね」

そう言って、西部雅子さんがその模型を指す。

「どうしても、巧(うま)くいかないのよ」

西部雅子さんは、そのベルトコンベアの上に、円を連結させた紙を置く。

西部雅子さんがベルトコンベアを動かすと、その紙の円の列が動いていく。

「回転寿司の模型だ」

キヨカが歓声を上げる。なにが面白いのか。

しかし、こうして模型をすぐに作るなんて、本気で回転寿司を作るつもりなんだ。

ほんの少しだけ、酒の席だけの話題じゃないかと思った自分を恥じる。

この模型だと、問題はなさそうに思える。

なにが巧(うま)くいかないんだろう？

しばらく見ていると、カーブの所で、曲がりきれずに乗り上げてしまった。

「なかなか巧(うま)くいかなくてね……」

西部雅子さんは眉間を押さえる。

なるほど……こういう仕組みでレーンを回そうとしてるんだ。実際の回転寿司はどうだか知ら

ないけど、こういう仕組みならできそうだ。

カーブの箇所は、全体的にプレートを動かせば、下になにもなくても大丈夫だろう。

問題は、そのカーブを曲がりきれないって事か。

方形(ほうけい)じゃ、どう考えても曲がるはずはない。だから、円形にしたんだ。でも、曲がろうとすると、曲がりきれずに乗り上げてしまう。カーブの角度を緩くすれば……。それだと、レーンの面積が広がってしまう。

俺が知っている回転寿司だと、きちんと曲がっているんだから、なにか方法があるはずだ。

「あなたたちは、実際にその機械を見た事があるのよね」

「あります」

キヨカが即答しやがった。そこは、ぼんやりとはぐらかしておくべきだと思うんだがな……。

「だったら教えて欲しいの。なにか、あなたたちの知っているものと、違う所があるのかしら。どうすれば、こんなカーブを綺麗に動かせるの？」

必死の形相で、キヨカの肩を掴む。さすがのキヨカも、その勢いに押されて戸惑っている。

「あの……私は……」

俺もそうだが、回転寿司の仕組みなんて知るはずもない。食べるだけの客だ。仕組みなんて、考えた事すらない。むしろ、こういう模型を見て、この仕組みならできそうだな……と思わされたくらいだ。こっちが教えられている。

「あなたも、知っているものと違う部分があれば教えて欲しいの」

西部雅子さんの目は、うっすらと涙が浮かんでいる。どうしようもなく、俺たちに縋るしかないという事だろう。

しかし……。

「すみません。俺たちは、機械の仕組みは全然わからないんです」

がっかりさせたくないけど、事実だからしょうがない。

「そう……………よね」

西部雅子さんは、ゆっくりと崩れるように座り込む。

「トールちゃん、なんとかしてよ……」

そう言われても、俺にどうしろと？

回転寿司の機械の仕組みなんて、わかるわけないだろ。

「俺だって、なんとかしたいけど、わかるわけないだろ」

「役立たずだね……」

「それを言うなって」

わかってても、実際に言われると堪(こた)えるんだよ。

「そうだよね……」

キヨカは、自分の足下にいる西部雅子さんを見る。

あれはきついな。

でも、なにもできないかもしれないけど、なにか手伝おうと思ってここに来たんだ。

だったら、なにか手助けしないと。

なんだろう。見えない部分はわからないけど、見える部分が、俺の知っている回転寿司と違う気がする。

そりゃ、細かなデザインは違うだろうけど、もっとそういう部分じゃない所が違う気がする。どこだ。

どこなんだ。

なにが違う？

じっと見るが、違和感だけで、それがなにかはっきりしない。

「なあ、キヨカ」

「なに？」

「このレーンさ、なにか違わないか？」

「違う？そんなの、違って当たり前じゃない？ 世界が違うんだし」

「そういう問題じゃないだろ。デザインっていうか.....このレーンがさ.....」

上手く伝えられない。すごいもどかしい。

「そうだね。私たちが知ってるレーンって、円形じゃないもんね。なんかさ、白い三日月みたいじゃない。それがいっぱい繋がってるよね」

「そうだな。レーンは白い.....って、そうだよ。それだよ」

今まで気付かなかった違和感の正体が分かった。

俺が知ってるレーンは、キヨカが言うように、三日月のような形をしていた。円形だとずれやすく乗り上げてしまうが、この形ならきちんと回るし、噛み合うようになるので、乗り上げるような事はないはずだ。

「西部さん」

俺は、早速その事を告げる。

「ちょっと試してみるわね」

俺たちの話を聞くとすぐ、周囲にいた人たちに指示を出す。

それからすぐに、俺たちが見慣れているレーンの模型ができあがった。

「そうだよ。これだよ」

「でも、その下の仕組みはわからないからな.....。俺たちがわかるのは、ここまでなんだよな」

これ以上のアドバイスは、どう考えてもできそうにない。これがダメなら、全く違う方法を探さないといけなくなる。

頼むから、これで成功してくれ。

俺たちは全員で祈る。

誰もが祈る中、三日月に切って繋がった紙をを乗せて、ベルトコンベアが動き出す。

ゆっくりと動いたそれがカーブに差し掛かる。

「お願い」

西部雅子さんは、目を閉じて祈る。

俺たちも、全員が成功を願った。

そして――

紙で作ったそれは、見事カーブを曲がりきった。そして、そのまま向かいへと動いていく。

「……………った。……………やった。……………やったあっ！」

西部雅子さんは、跳び上がって喜ぶ。

「トールちゃん」

「ああ、やったな」

俺たちも心から嬉しかった。

なんだろう。この達成感。

まだ完成したわけじゃないし、ただの模型だ。それなのに、完成したみたいに嬉しい。

「ありがとう。あなたたちのお蔭で、だいたいの基礎ができあがったわ」

西部雅子さんは、俺たちの手を取り、ぶんぶんと力強く振る。

「え、えへへっ。よかった……」

キヨカはうっすらと涙を浮かべている。

俺も、じんわりと熱いものを感じていた。

感動して泣けるんだな。

泣くほど感動するって、泣くほど嬉しいって……こんなに、いい気分なんだ。

男の涙は恥ずかしいと思ってたけど、そうでもないみたいだな。

俺たちと一緒に、この会社の人たちも、肩を組んだり抱き合ったりして喜んでいる。そのみんなが涙を浮かべている。

「これで、ようやく本格的に制作には入れる。さあ、これからもっと大変よ。これを、改良して、効率をよくして、速度を決定して……とにかく、する事は山積みなんだから」

西部雅子さんのその言葉に、社内の全員が関の声を上げる。

すごい団結力だ。そして熱い。

「ありがとう。これからも、なにか気付いたら言ってね」

「はい。私たちができる事なら」

「ありがとう。さあ、実際にお皿を載せてみましょうか」

これで完成した気分だが、実際はまだまだこれからだ。

どういう風な手順でできあがるのかはわからないけど、こうして制作に携わるって、なんだか面白い。

今まで全く興味がなかったけど、こういう職業もいいかもしれない。

そんなこんなで、その日はずっとここにいた。

楽しかったからか、あっという間に時間が過ぎて、気が付けば夜になっていた。

「あらら……もうこんな時間か……。みんな、今日はこれで上がって。また続きは明日にしましょう。お疲れ様」

西部雅子さんの声を合図にして、みんなが伸びをしたり、体をほぐしたりして、帰宅の準備を始める。

「今日はかなり進展したな」

「そうだな。思っていたよりも、順調かもしれないぞ」

「これなら、すぐに商品化できそうだ」

「他に盗まれる前に、うちが完成させないとな」

「こんなもの考えるなんてな……。さすが雅ちゃんだ」

「本当だな」

「この発想はすごいわ」

「雅子さん、すごいですよね……」

「これが完成したら、俺たちすごいよな」

「今から楽しみだよ。雅ちゃん、お疲れ様」

「お疲れ～」

「明日も頑張るぞ～」

「楽しい仕事になりそうだ。いいもん作ろうな、雅ちゃん」

みんなが、それぞれ西部雅子さんに声を掛けて帰っていく。

なんだか、放課後の教室って感じがする。大人になっても、こういう雰囲気はあるんだな……

。

そう思うと、これから社会人として、会社勤めになったとしても、不安は少ないかも。

みんなが帰ると、急に閑散とする。残っているのは、俺とキヨカと西部雅子さんだけだ。

さて、俺たちも帰るかな。

……って、帰るって事は、あの荷物をまた持って下ろさないといけないんだよな。

はあ～。

それを考えると、げんなりしてくる。

でも、そうするしかないんだよな……。

「じゃあ、俺たちも帰ろうか」

「そうだね」

俺たちも帰り支度を始める。といっても、持ってきたトロリーバッグを持つくらいだ。

それじゃ……と、帰ろうとすると、

「ねえ……」

と、声を掛けられて、西部雅子さんを見る。

「なんですか？」

「君たちは、いまどこに泊まってるの？」

「私たちは……どこだっけ？」

キヨカが答えようとしたが、俺に質問をしてきた。そりゃそうだ。どこに泊まるかなんて、決まってないんだから。

「そのですね……。別に決めてないんです。ただ、今は、以前に西部さんが連れていってくれたホテルに泊まっています。でも、特にそこじゃないってわけでもなくて……」

俺も、どう説明するべきか悩む。

「そうなんだ。それとね、明日はどうか？ 明日もこうしてお手伝いしてくれないかしら」

明日も……か。

俺としては、やぶさかじゃない。

色々とお世話になってるし。

他にする事といえば、この世界の探索だが、これに関しては、蟲(ベステート)に動きがなければどうする事もできない。蟲(ベステート)次第というわけだ。

「明日は、大丈夫です。でも、いつまでというのは……。俺たち、旅の途中で、予定が未定なので……」

「そうだったわね。旅をしているんだったわね。だったら、無理は言えないか……。でも、できれば、手伝ってもらえれば嬉しいかな」

「それなら、俺たちは……」

キヨカの意見を聞こうと見ると、こくんと頷いた。

「大丈夫だよ、トールちゃん」

「……というわけなので、いつまでという約束はできませんけど、ここにいる間は、お手伝いさせてもらっていいですか？」

「もちろんよ。大歓迎」

西部雅子さんは、本当に嬉しそうに飛び跳ねて喜ぶ。それを見ているだけで、こっちも嬉しくなってくる。

「ずっと手伝ってくれるなら、もしよかったらなんだけど、ここに泊まるのはどうかしら」

予想外の提案だった。

「仕事が忙しいと、泊まり込む事もあるから、仮眠室があるのよ。さすがに、ホテルのような寝心地はないけど、どうかしら？」

別に寝心地に拘るつもりはないので、願ってもない提案だ。

「ここに泊まるなら、お手伝いも楽だね」

キヨカも賛成のようだ。

「お世話を掛けますけど、いいですか？」

「もちろんよ。ここに泊まってくれれば、連絡先がわからない事もないし。むしろ、本当によいのかしら」

「俺たちは問題ないです。それじゃ、お言葉に甘えて、しばらくお世話になります」

「宿が決まってよかったね」

「そうだな」

その日その日で宿を探していたし、結局あのホテルになるんだけど、ここまでの移動を考えればここに泊まればありがたい。

「そうだ。しばらく手伝ってもらうわけだし、今日も手伝ってもらったから、ちゃんと報酬を支払わないといけないわね。普通は月給だけど、日給計算で日払いの方がいいわね」

これまた予想外だった。

俺たちは、報酬をもらおうと思って手伝っていたわけじゃない。

「でも、俺たちは……」

「きちんと、仕事をしている以上、報酬はもらわないといけないわよ」

そう言われると、断るのは失礼になりそうだ。

「わかりました」

「そうね……一日当たり、二〇〇〇〇円だけど、それでいいかしら」

俺たちは、思ってもみなかった金額に、お互いの顔を見合わせてしまった。

「あら？ やっぱり少なかったかしら」

「いえいえ、そんなに多いと思ってなかったのだから……」

日給で二〇〇〇〇円なんて……。どんな職業だよ。普通のバイトでも、なかなかないんじゃないか？ でも、時間にすれば一〇時間くらいはいたのか。だったら、そんなものかな……。

ともかく、給料をもらえるってだけで予想外だ。

「じゃあ、今日はここに泊まってもらおうとして……。後で書類が必要になるから……。でも、先にやっぱり……」

と、なにやら独り言を言っているが、これからの事でも考えているのだろう。

「トールちゃん」

キヨカがこそっと話し掛けてくる。

「どうしたんだ？」

なんだろう？

「お腹空いたよ」

「……………」

おいおい。そんな事かよ。

なんて思ったが、俺も実は空腹だったりする。

「そうだな。とりあえず、どこかへー」

行こうと言いかけた時、

「じゃあ、食事に行きましょうか」

唐突に言われて言葉を失った。

「今日は週末だから、ちょっと混んでるかもしれないけど。おすすめのお店があるのよ」

なんだか、お世話になりっぱなしだけど……。

「トールちゃん、せっかくだし、おすすめのお店に連れていってもらおうよ」

「……そうだな」

世話になるのは心苦しいが、かといって遠慮するのも悪いよな。

「お願いします」

「じゃあ、行きましょうか」

俺たちは、西部雅子さんに連れられて、夜の街へ繰り出した。

夜の街は、とても賑やかだった。

駅前には賑やかな声で溢れている。誰もが楽しそうにしている。

昨日や一昨日よりも賑やかだ。場所の違いもあるんだろうけど、やっぱり週末だからっていうのもあるんだろう。

っていうか、週末なんだ。

ここの曜日感覚がないからな……。

とにかく、どの世界でも週末は楽しそうだ。やっぱり、会社帰りに呑みに行ったりするんだろう。そこは変わらないんだな。

賑やかな街を、西部雅子さんについて歩いていく。先導してもらわないと、どこになにがあるのかわからない。見失わないようにしないと。油断すると、すぐに人混みに紛れて、見失いそうになってしまう。

それにしても、荷物がなくてよかった。

またあそこに戻るの、トロリーバッグは置いてきた。あんな重い荷物を持ったまま、ここを歩いていたらどうなっていたか。

「ねえ、どんなお店だろうね」

キヨカが俺にだけ聞こえるように言う。

「さあ？ そういえば、なにも聞いてないよな」

俺だって楽しみだったりする。

最初に入ったのが、鮎屋だったのが印象的だったからだろうか。

回転寿司じゃない鮎って初めてだったので、それだけでもすごい体験だった。

っていうか、金額が既に俺の常識にはないものだった。

それがあるので、自然と期待してしまう。いや、別に高級店にってわけじゃなくて、この人がおすすめするお店ってどういう店なのかってのが、純粹に興味がある。

人混みを抜けて、少し人が少なくなった。どうやら、路地裏に入ったらしい。

表通りじゃなくて、こういう裏通りにいい店ってのはあるんだな。やっぱり、知る人ぞ知る穴場なんだろうか。

人の少ない通りをしばらく歩いて、さらに奥へ進んでいく。

こんな所に、本当に店があるんだろうか。

っていうか、全く知らない人にこんな場所に案内されたら、誘拐とか考えてしまうかもしれないぞ。

そこそこ信頼がないと、ここはちょっと危険だな。

少しだけ警戒していると、

「ここよ」

と、そこには確かにお店があった。案内されたのは、どうやら洋食のお店のようだ。

西部雅子さんは馴染みらしい。

店内に入ると、お店の方がお久しぶりです、と笑顔で挨拶をしていた。

「ほら、入って」

入り口で突っ立った状態だった俺たちは、その声でようやく動き出す。

店内は、レトロなヨーロッパ調とでも表現すればいいのだろうか。カントリー調というか、どこか素朴なヨーロッパの田舎町みたいな雰囲気だ。

「なんだか、すごくいい感じのお店だね」

「ああ、そうだな」

ヨーロッパに行った事はないけど、なんだか懐かしいような感じがした。

店内は静かで、クラシックだろうか、それが聴こえるだけだ。

テーブルはほとんどが埋まっているが、どのテーブルもなんだか静かで、ゆったりとこの空間を楽しんでいるように思えた。

俺たちは、西部雅子さんについて行って、一番奥にあるテーブルについた。

俺たちは並ぶように、西部雅子さんの向かいに座った。

間接照明でぼんやりと照らされていて、なんだか幻想的でもある。

「特に嫌いなものはなかったのよね」

と、確認するように訊かれた。

「はい。特にこれとって……」

「そう。じゃあね、おすすめがあるんだけど、いいかな？」

「はい」

「私もいいです」

特に断る理由もないし、断るのは悪い気がする。

それに、ここに通っている人のおすすめなら、不味いものはずがない。

それなら、ここは任せる方がいい。

「じゃあ、いつものを三人前お願いします」

と、注文する。

「いつもの、で通用するんだね」

キヨカが小声で話し掛けてくる。

「ああ、すごいな」

「いつもの、で通じるのって、やっぱりすごいよな。ってというか、そういう注文を実際に見るのは初めてだ。俺たちのような学生だと、なかなかない。

まあ、学食とか行きつけの食堂なんかがあれば、それで通じる店もあるのかもしれないが、俺はそこまで毎回同じものってわけじゃない。

なかなか同じものばかりってのはない。

だから、なんだかそれで通じるのって、大人だな……って思ってしまう。

「今日はお疲れ様」

テーブルに肘を突いて、笑顔で話し掛けられる。

なんだかその仕草が幼く見えて、可愛いと思ってしまう。

「あ、いえ……。俺たちは別に……」

そんな仕草を見せられて、ついたじろいでしまう。

「トールちゃん」

キヨカにお約束のように足を踏まれる。

「……ってて」

どうして、そういうのは気付くんだよ。っていうか、俺がわかりやすいのか？

「でも、本当に私たちなんかで役に立ってますか？」

キヨカがさもなにもしていません、という顔で話しを続ける。

「ええ、大助かりよ。なにせ、見た事もないものを作ろうとしているわけだから。見た事がある……というか、全体的なビジョンが見えている人の意見は参考になるわ」

「そういうものですか」

キヨカがしんみりと頷く。

俺たちには、やっぱり実感がわからない。

それというのも、生まれた時から、回転寿司は当たり前のようにあった。

日常の光景といえはそれまでだ。

だから、そういうのがないというのが想像できないし、これから作るっていうのがよくわからない。

ただ、そういうものを作っていくのは楽しい。俺たちは、やっぱりただの客だったから、詳しい構造はわからない。

なので、機械部分に関しては、俺たちも同じ立ち位置だ。

「明日もよろしくね」

「はい」

お金をもらういじょう、そこはきちんとしなければならない。

どれだけ力になれるかわからないけど、できる限りはしていこうと思う。

「なんだか、こういうのって楽しいよね」

「そうだな」

キヨカの意見に賛成だ。

「楽しんでくれているならよかったわ。無理強いはしたくないし。仕事は忙しいけど、みんな生き生きと楽しそうにしてくれて、こっちも楽しいのよね」

今日、みんなが帰る時、楽しそうにしていた。

俺たちも、学校は確かに授業は大変だけど、それなりに楽しんでいる時間があるのは確かだ。

勉強が大変だから、それから解放された放課後に、あれだけ騒げるのかもしれないけど、それでも全部がそうじゃないはずだ。

まだ学生だから、漠然とだけど、仕事もそうであればいいなと思う。

もちろん、大変だろうけど、やっぱり楽しいと思える瞬間があるといいな。

ってというのは、やっぱり働いてない奴の理想だろうな。

「今日で、レーンの構造は前進したから、明日はお皿ね」

「お皿……ですか？」

キヨカが訊く。

俺もよくわからない。

お皿って、なにをするんだろうか？

「レーンが決まったから、今度はそれに合わせてお皿を開発しないと。大きさは重要よ。重さもあるし、デザインもある。しないといけない事は多いんだから」

なるほど……。

やっぱり、俺たちにはそういう感覚がなかった。

言われてみれば当たり前なんだけど、それがとても意外だった。

回転寿司のお皿といえば、こういう形というものがあったから、思いつけなかった。

全くないんだから、原型なんてあるはずがない。

なにもないところから、作り上げていかないといけないんだ。

「というわけで、あなたたちの意見に期待してるわね」

「期待……ですか」

そう言われて、なんだか背筋が伸びるようだった。

「いくつかサンプルは発注してるんだけど、そこから選ぶのか、あなたたちの意見を聞いて、違うものになるのか……。とにかく、サンプルは明日のお昼の予定だから……」

と話していると、料理が運ばれてきた。

「お待たせしました」

そう言って、それぞれの前に料理が置かれる。

なんだかパイ生地……じゃないな？ 似ているけど、なんだか違う。

かといって、ミートパイって感じでもない。

これはミートソースかな？

それが、パイ生地みたいなもので、層になっている。

上には……チーズか？ うん、チーズがとろりと乗っている。

「さあ、このラザニアはとっても美味しいのよ」

どうやら、目の前にあるのはラザニアらしい。

ラザニアって、名前は聞いた事があったけど、実際に見た事はなかった。もちろん、食べた事もない。

こんな料理なんだ……。

「これがラザニアなんだ……。私、初めてだよ」

「……俺も」

「あら、初めてなの？ とっても美味しいんだから」

テーブルには、パンが入ったバスケットが置かれる。そして、西部雅子さんの前にはワイングラスが。そこに、赤ワインが注がれる。

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

そう言って、店員さんが戻っていく。

「今日もいい感じね」

そう言うと、西部雅子さんはナイフとフォークでラザニアを食べる。

「うん、最高」

その笑顔は、本当に美味しいんだとわかるものだった。

「ほら、食べてみて。ちなみに、こっちは食べ放題だからね」

「あ、はい。いただきます」

「いただきます」

俺たちも初ラザニアを食べる。

西部雅子さんがしていたように、ナイフで切ろうとすると、思ったよりも、ふにゃふにゃしていた。

なかなか切りづらいぞ。

それでも、なんとか一口大に切って食べる。

「……ん？」

「美味しい……」

ミートソースとパスタのようだけど、スパゲッティとは全然違う。形だけじゃなくて、食感もだし、味も違う。

なんだろう、これ。

ミートソースはミートソースだけど、ただのミートソースじゃない。なにか他にも入っているんだろうか。

初めて食べた料理だし、俺は料理評論家でもないからわからない。

ただわかるのは、これはとても美味しいという事だ。

「美味しいね、これ」

キヨカはぱくぱくと食べている。時折、バスケットのパンもちぎって食べる。

「初めてだけど、すごく旨い」

俺も止まらない。

これは美味しい。

「よかったわ……。ここのは、特別だからね。ここのラザニアを食べちゃうと、他では食べられないわよ」

「すっげえ旨いです」

これは、大袈裟じゃない。本気で、心の底からそう思う。

こんな美味しいものを食べてしまうと、他で食べれないかもしれない。

っていうか、ここで食べたものはどれも美味しくて、元の世界で同じものを食べたら、物足りなく思ってしまうそうだ。

俺たちは、あっという間に平らげてしまう。

「美味しかったね……」

「ああ」

満腹だ。

ソースのせいだろうか。パンもとても美味しく感じて、ついつい食べ過ぎてしまった。

「満足してもらえたみたいでよかったわ」

向かいに座っている西部雅子さんは、終始笑顔だった。

「すごく美味しかったです」

キヨカが笑顔で伝える。

「そう。よかったわ。二人とも、食後になにか飲む？」

「えっと……じゃあ、私は紅茶を」

「紅茶は、なにか銘柄の指定はある？」

「あ、えっと……その……」

まさか、そういう質問をされると思っていなかったんだろう。

普段は、ティーバックとか自販機なんだろうな。銘柄を気にして飲んでないはずだ。

「えっと……ダージリンの……」

ダージリンくらいなら俺だって知っている。しかし、この世界にその地名があるかは知らないぞ。

他人事(ひとごと)だから面白い。

「ストレート？ それとも、ミルクかレモン？」

「えっと……レモンで」

「ダージリンのレモンね。あなたは？」

おっと、今度は俺か。

「俺はコーヒーで」

「なにか指定は？」

「えっ？」

コーヒーもそんなのあるの？

やばっ。

全然考えてなかった。

コーヒーだったら、それだけでいいものだと思っていた。

甘かったみたいだ。

隣では、キヨカが面白そうに笑っている。

ちくしょう……。

この立場になると、結構大変だな。

「えっと……」

とりあえず、コーヒーの種類を思い浮かべる。

っていうか、種類ってそんなにあるのか？

カフェ・オ・レは種類だけど、コーヒーとはちょっと違うよな。

いやいや、種類じゃなくて、銘柄って事だよな。

紅茶は茶葉の産地だったから、コーヒーも豆の産地の事だよな。

余計にわからなくなってきた。

加糖とか無糖は銘柄じゃない。

自販機の缶コーヒーがほとんどだからな……。缶コーヒーのメーカー名しか思い浮かばないぞ

。つうか、産地とかって考えて飲んだ事がない。

えっと……。

なにかないか。なにか……。

あっ、そうだ。

「ブルーマウンテンで」

「ブルーマウンテンね」

よかった……。なんとか乗り切った。

安心すると、エスプレッソという言葉が思い浮かんできた。

いやいや、エスプレッソはな……。そもそも、銘柄じゃないだろ。

脳内を整理していると、西部雅子さんが店員を呼ぶ。

「ダージリンのレモンと、ブルーマウンテン、それと、私は……いつものアプリコットティーで」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

やっぱり、食後はこうして落ち着きたくなるのよね……」

店員は、戻る時に、食べ終わったお皿を持っていった。

「ここはね。パスタがとても美味しいのよ」

唐突に、西部雅子さんが話し始めた。

「どれも美味しいんだけど、その中でもおすすめなのが、ラザニアだったの。また機会があれば、他のメニューも食べてみて」

「他には、なにかおすすめってありますか？」

キヨカが訊く。

「そうねえ……」

西部雅子さんはしばらく考える。

「やっぱり、ラザニアが一番かな。スパゲティも美味しいわよ。ミートソースもペペロンチーノも……。でも、やっぱりラザニアね」

どこまでもラザニアらしい。

確かに、さっき食べたラザニアは美味しかった。

「それと、ここでの食後のお茶は最高なんだから」

そう言っていると、それぞれ注文したものが運ばれてきた。

「お待たせしました」

それぞれの前に、それぞれが注文したものが置かれる。

前に置かれた瞬間……というか、その前からだけど、コーヒーの香りが充満する。

「ちょっと、匂いがすごいよ」

「ああ、すげえ香りだな」

紅茶の香りもするのだが、断然コーヒーが勝っている。

「やっぱり、コーヒーは香りが強いわね」

と言いつつ、西部雅子さんは、自分のカップを鼻に近付ける。

「……………うん、とってもいい香り」

コーヒーの香りが強いが、ほのかに甘い香りがする。それが、アプリコットの香りなんだろう。

こんな風に、拘(こだわ)って飲んだ事がないからな……。

喫茶店に入った事はあるけど、だいたいコーヒーか、紅茶でもレモンかミルクか選ぶだけで、銘柄とか産地とか、そういうのは気にした事がなかった。

それ以前に、どういうものがあるのか知らないんだけど。

もちろん、喫茶店では、色々な茶葉があるので、そこから選ぶのだが、そういう時は適当なものをチョイスしていたからな……。

食後に、こうしてコーヒーや紅茶を嗜(たしな)むなんて、なんて優雅なんだ。セレブって感じがする。

なんだか、これだけで大人の世界って感じだ。

特になにもしない、ゆったりとした時間だった。

事務所に戻ってくると、結構いい時間だ。そろそろ日も変わるかという頃だ。

「そうだ。忘れないうちに契約書を書いてもらおうかな。印鑑(いんかん)は……ないよね」
ないですね。

こくと頷く。

「そうだな……。サインと指で捺印(なついでん)してもらおうかな。……って、銭湯に行く前にしておくべきだわね」

朱肉で汚れるよな。確かに、これなら銭湯に行く前の方がよかっただろう。

「……ごめんなさい。とにかく、書類は明日にしましょうか。ベッドはね……、そっこの部屋にあるから。それじゃ、今日はお疲れ様。鍵はかけていくから。おやすみなさい」

それだけ言うと、西部雅子さんは出て行ってしまった。

嵐のようだな……。

などと思ったりもしたが、こうして残された俺たちは、どうすればいいんだ？

本当にここに残されると、途端に不安になる。

「今日は疲れちゃったし、寝ようか」

キヨカはベッドがある部屋に移動する。

なんだか、マイペースというか、順応性があるというか。

でも、俺も疲れた。

特にあの重たい荷物な。

もう、寝よう。

と、俺もベッドがある部屋に移動する。

「……なるほど」

そこには、折り畳み式のベッドと、掛け布団が並んでいた。

それも一台や二台じゃない。それだけ、泊まる事があるって事なのか。

俺たちは、それぞれベッドを広げる。

こうして、キヨカと別だっただけで、ぐっすり眠れそうだ。

「なんだか、淋しいな……。一緒に……」

「却下する」

「くすん」

わざとらしいだろ、それ。

「じゃあ、もう寝るぞ」

「うん。おやすみなさい」

それ以上、しつこくはしないようで、それぞれのベッドで、ゆっくりと眠る事ができた。

ただ、ちょっと硬すぎだろ。もうちょっとクッション性が欲しいな……。

そんな不満もあったが、横になるとすぐに眠ってしまった。

翌朝は、賑やかな足音で目を覚ました。

「あら、起こしちゃったみたいね。おはよう」

と、西部雅子さんが顔を覗かせる。

「ん？ あれ？おはようございます」

寝起きで頭がぼんやりしていて、今の状況が理解できない。

「ん？ どうしたの.....？」

横のベッドでは、キヨカも目を覚ました。

「あれ？ 今って何時.....？」

キヨカは寝惚(ねぼ)けているのか、譫言(うわごと)のように呟く。

「今は六時かな」

西部雅子さんが、律儀に答える。

「じゃあ、もうちょっと.....」

ぱたんともう一度横になるキヨカ。

っていうか、まだ六時なんだ.....。

普段なら、俺もまだ寝てる時間だ。

俺も.....。

と思っただが、はっと急に鮮明になった。

「あ、すみません」

慌てて起きる。

もう、出社してるんだ。

って事は、もう仕事は始まっている。

なのに、俺たちはまだ寝てて.....。

寝坊じゃんか。

「すみません。すぐに起きます」

「別にいいのに。始業までは、まだ時間があるから」

「でも.....」

「みんな、今の仕事が楽しくて、つい早く来てるだけだから。普段は、そんな事ないのよ」

そう言う、西部雅子さんの笑顔が痛い。

こんな状況で、ぐっすりと眠れるわけがない。

「おい、キヨカ.....。起きろって」

二度寝中のキヨカを起こそうとするが、なかなか起きる気配はない。

「本当にいいのよ。ゆっくり休んでて」

そう言って、戻っていく。

そう言われてもな.....。

隣の部屋では、おそらく全員が揃っているんだろう。

なにやら、ああでもない、こうでもないとしている声が聞こえてくる。

このまま、本当に寝るわけにはいかないよな。

キヨカは起きる気配はないし……。

かといって、このままだったら、どうして起こしてくれなかったのかって、怒るんだろうな。

まったく、理不尽だ。

起こしても起きないくせに。

それでも、する事はしておかないとな。

「おい、起きろよ」

何度も体を揺する。

しかし、やっぱり起きる気配はない。

「する事はしたよな」

これ以上は、時間の無駄だろう。

手櫛(てぐし)で髪を整えて、隣の部屋に向かう。

「起きなかったお前が悪いんだぞ」

最後に、ちらりとキヨカを見る。

そこには、案の定みんなが揃っていた。

なにやらホワイトボードを見ていて、なにかを議論しているようだ。

「おう、おはよう」

「ごめんね、うるさかったかな？」

「寝坊だぞ」

「ゆっくり休めた？」

「今日もよろしくな」

「頼むぜ、少年」

などなど、温かい言葉を掛けられる。

「すみません。……ところで、今はなにを……」

頭を下げてから、ホワイトボードを見る。

「これはね……」

そこには、サウナとジャグジーの文字が。

「これって……」

もしかして、昨日の？

「そう。昨日のアイデアを、みんなに説明してたの」

なんという早さだ。

昨日の夜、俺が大雑把に説明しただけだぞ。それを、もう実行しようとしているのか。

会社ってこんなものなのか。

まだ、回転寿司だって完成してないんだろ？

それなのに、もう次の……。

社会人って、大人ってすごいんだな。

なんだか、感心させられた。っていうか、俺には到底できそうにない。

こうならないといけないのか。

それを、こうして事前に知れただけでもいいのかもしれないな。

「おはよう。後で契約書のサインをお願いね」

と、俺にそれだけ言うと、ホワイトボードの説明を再開した。

プレゼンテーション……だよな。

よく見ると、そこには、昨日の人たち以外にも数人いる。おそらく、他のフロアの人たちだろう。

内容からして、サニタリー関係は部署が違うとかそういう事だろうか。しかし、ほとんどのメンバーは一緒だしな……。

「西部、それって、本当に需要があるのか？ わしには、想像できないんだがな……」

「もちろん、需要はあると思います。特に、女性に人気になると思っています。この提案は、昨日の夜の事でしたので、アンケートなどのデータはありませんが、確実にヒットする自信があります。失敗を懸念(けねん)するよりも、他社にアイデアを奪われないうちに、我々で手掛ける方が得策と考えます」

西部雅子さんは、質問してきた男に答える。

そこそこの歳のようだし、おそらく会社の役員かなにかだろう。そんな人相手にも、一切怯(ひる)む事なく説明している。

本当にすごいな……。

「あたしは、これには賛成です。女性には受けると思っています」

「サウナってのは、蒸し風呂みたいなもんか？ よくわからないんだが、そんなのが気持ちいいのか？」

「それは、提案者に訊いてみましょうか？」

うっ、なんだかいやな予感が。

「ねえ、説明してくれないかしら？」

やっぱり……。

西部雅子さんがこっちを見ている。

これは、俺が説明するって事だよな。

西部雅子さん相手ならともかく、こんな大勢の前で……しかも、なんだか偉そうな人たちの前でなんて、ゼミの発表よりも緊張するぞ。

しかも、内容はサウナとジャグジーだろ。

そんなに詳しいわけじゃないのに……。

どうしたものかな……。

でも、この流れだとしなないわけにはいかないよな。

西部雅子さんに手招きされ、隣に立つ。瞬間、みんなの視線が集中する。

「えっと……。ジャグジーとサウナですよ。これは、ここにはまだないようですけど、俺が知

っている限りでは、人気が出ると思います」

みんなの視線が痛い。

うわあ。足が震えてきた。

緊張で顔が熱い。

「サウナは、女性だけでなく、男性にも人気があります。汗をかく事で、体内の不純物を排泄(はいせつ)し、リフレッシュ効果があるので、性別関係なく利用します。ジャグジーは、これもリラックス効果があるので、男女関係なく人気があるものです」

「それは、既にどこかに存在しているという事かい？」

うわっ質問だ。

しかも、なんだか痛いところを……。

「えっと……」

どう答えたらいいんだろう。

「他の国には、既にあるようなら、我々だけの独占というわけにはいかないだろう。前例がある以上、オリジナルというわけにはいかない」

「その辺はどうなの？」

「えっと……。俺が知っているのは、試作品というか……実験中というか……。試験中というか……」

「つまり、開発は始まっているけど、実用化はされていない。もしくは、サンプルは完成しているけど、効果の実験を行っている。そういう事？」

「……まあ、そんな感じだと思います。すみません。俺もそんなに詳しくないんです」

「ありがとう。他でも開発が行われているというなら、尚更急がねばならないと思います」

「だが、それは他社の企画を盗むという事にならんか？」

そうくるか。確かにそうなるよな。

「我々が知っているのは概要だけです。詳細は彼も知らないわけですから、問題ないかと思えます」

しかし、西部雅子さんは怯まない。

「わかった。前(さき)の回転寿司もそうだが、全て任せるよ」

「ありがとうございます。あと、もうひとつありまして……」

「まだあるのかね」

なんだか、呆れているようにも見えるが、どこか嬉しそうでもある。

「はい」

「なんだね」

「はい。コインランドリーというものでして、都度課金で、洗濯ができるというものです」

「クリーニングで構わないだろう。どこが違うんだね」

「クリーニング店と違い、自分でできるという事です」

「わざわざ自分でするものかね？ それも、お金を払って」

「はい——」

西部雅子さんは、下着などは自分で洗いたいと思うなど、必要と思わせるような説明を続ける。

「……わかった。それもやってみたまえ」

「はい。ありがとうございます」

許可が出た事で、西部雅子さんは満面の笑みになる。

「まったく……。これじゃ、我々の立場がない」

やれやれと話しながら、数人が退室していく。

「ありがとう。これも、あなたたちのお蔭よ。これから、どんどん忙しくなるわよ。もし、他にもこんなものがあつたら……。というのがあつたら、教えてね」

まだなにかをしようと思ってるんだ。

「じゃあ、忘れないうちに契約書と、昨日のお給料を支払うわね」

と、俺たちが寝ていた部屋に連れて行かれる。

ベッドでは、キヨカがまだすぴすぴと寝ている。

俺が大変な思いをしたってのに、こいつはどうしてこんなにすやすやと……。

なんだか、顔に落書きでもしてやりたくなるな。

「じゃあ、ここに署名と指紋を」

言われるままに、俺は署名して、朱肉に指を押しつけて、紙に押しつける。

「じゃあ、これがあなたたちの昨日の分ね」

と、茶封筒を渡されたので受け取る。

「ありがとうございます」

「一応、確認してね」

中身を見るのは失礼だと思ったので我慢していたが、そう言われれば見ても大丈夫だよな。

茶封筒から中身を取り出す。

「……えっ？」

そこには、壹万円の紙幣が四枚入っていた。

「あの……これって……」

確か、契約では二〇〇〇〇円だったはずだ。なのに、どうして？

「間違っていないと思うけど……。ちゃんと、二人分の四〇〇〇〇円入ってるでしょ？」

「……………はい」

ちょっと待てよ。

二〇〇〇〇円ってのは、一人当たりって事だったのか？

それは、尚更多すぎるだろ。

「こんなに……」

「言ったでしょ。アイデア料と口止め料だって。だから、このアイデアを他では絶対に喋らないでね」

「……………はい」

思わぬ事に、手が震える。

「じゃあ、そろそろ彼女を起こして、みんなで朝食にしましょうか」

そう言うと、西部雅子さんはキヨカを起こそうとする。

「ん……………んにゃ、はう……………」

俺となにが違うんだろうか。西部雅子さんがすると、キヨカはすんなりと目を覚ました。
すげえ……………。

どうすればそんな風にできるのか、是非とも教えてもらいたいものだ。

「そろそろ起きて。みんなで朝食を作るわよ」

「……………あさごはん？」

まだ半分眠っているのだろう。こしこしと目をこすりながら言う。

「まずは顔を洗って、シャキッとしましょうね」

「はあい」

キヨカは言われるまま、ベッドから起き上がると、洗面所に向かった。

「すごいですね……………」

「どうかした？」

俺が感心している理由がわからないようだ。

「いやあ……………。俺が起こしても、あんな風に起きないんですよ。なのに、こんなすっきりと起こせるなんて……………。なにか秘訣でもあるんですか？」

「別にそんなの無いと思うけどな……………。さっきも、特になにもしてないし」

そうだな……………と少し考えて、

「きっと、君だと安心してるとんじゃないかな」

どういう事ですか？ と訊く。

「おそらく、彼女は甘えてるんだよ。安心してきっているから、甘えてしまうんだと思うの。だから、つついそうなっちゃうんだよ」

「そんなものですか？」

「そうだと思うけどな……………。私だと、どこか警戒しているのか、緊張しちゃうのか、それはわからないけど、そんな感じだからじゃないかな」

「そうですかね……………」

よくわからないが、そうなんだろうか。

そんな話をしていると、キヨカが戻ってきた。

「おはようございます」

「おはよう。あっちで、みんなで朝食を作るの。一緒に手伝ってもらえる？」

「はい」

キヨカは西部雅子さんに連れて行かれる。

みんなで朝食か……………。

普通は、会社で朝食ってのはないよな。多分、この会社ならではだろう。

……………っていうか、みんなで作る？

ここで？

確かに、キッチンがあったけどさ……。

こうして泊まる事もできるし、本当に設備が整ってるな……。

ここにいてもしょうがないので、隣の部屋に移動する。

そこには、昨日の人たちがなにかを相談していた。

「おっ。ちょうどよかった。ちょっと訊きたいんだけどさ……」

「なんですか？」

給料をもらってるわけなので、きちんと仕事をしないと。

なんだろうと思っていると、どうやらサウナについてだった。

それから、朝食ができるまで……っていうか、食べてる途中も質問されっぱなしだった。

仕事って大変だな。

そんな事を考えながら、朝食にと出された、鰯(あじ)の干物をほぐす。

うん、旨い。

「いつも、こんな風にしてるんですか？」

出汁(だし)巻き玉子を頬張りながら、キヨカが質問する。

「いつもじゃないけど、こうしてなにか朝からする時は、だいたいこうしてるかな。もちろん、どこかに食べに行く事もあるわね」

「そうなんですか」

「でも、こうしてここで作って、みんなで食べる事が多いわね。やっぱり、こうして一緒に食べてると、結束が強まるからね」

「そうだな。っていうか、ここでの食事が、一番旨いんだよな」

「そうそう。家で食うと、一人だからな……」

「ここの食事って、ありがたいんだよな……」

「そうそう。俺も、こんな風に朝飯食うのって、こういう時だけだしな」

「わかるわかる。わたしも、家だとね……」

キヨカの質問を発端(ほったん)に、みんなの会話が弾み始める。

なんだか、和やかでいいな……。

「まあ、こういう風に、需要もあるわけだし、やっぱり手作りでっていうのはいいものだしね」

「そうそう。雅ちゃんの料理は旨いんだよ。ホント、いい嫁さんになるよ」

「そうなのよね……。雅子さんの料理って美味しいから、うらやましいのよ」

「おれんとこのかみさんと代わって欲しいくらいだ」

「そりゃ無理だろ。お前のとこなんて、雅ちゃんが可哀想だって」

「んなの、おれだってわかってらい」

なんだか、みんな家族みたいな感じだ。

こういうのっていいな。

これだけだと、ここが会社だなんて思えないよな。まあ、普通の会社はこうはいかないんだろうけど。

これって、ある意味では理想の会社かな。

俺も、就活の時はこういう会社を希望したいけど、あるわけないよな。
そんな朝食を終えて、みんなは仕事を始める。
俺たちは、食器を洗うのを手伝った。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

昨日の続きもありつつ、今日はサウナやジャグジーの構想も始まった。

「これは、ラインを作らないと難しいかな……」

それぞれの作業を見ながら、西部雅子さんが腕を組んで唸る。

確かに、今は全員で全ての作業をしている。

回転寿司のレーンやレイアウトを考えつつ、サウナの構造を考えて、ジャグジーの構造も考えている。

手伝いながら、よくこんな風にできるなって感心していたが、みんなほとんどパニック状態だ。

そこへ、昼前になって、回転寿司で使用する予定の皿の見本が到着した。

これで、さらに処理しなければならない事が増えたわけだ。

それなら、まずは回転寿司だけに専念して、終わったら次はサウナやジャグジーでいいんじゃないかと思うんだけど、それだと他に先を越される可能性があるとかで、できるだけ平行作業をしたいと思います。

「やっぱり、難しいわね」

それでも、しばらくは見守っていた西部雅子さんだが、ついに決断したようだ。

「みんな。一度作業を中断してもらっていいかしら」

その声に、今まで作業をしていた全員が手を止め、西部雅子さんを見る。

「ごめんなさい。ここまでみんなですてきたけど、ラインを作って、分担作業にします」

その言葉を皮切りに、みんなの脱力する声が部屋に響いた。

「ふう～。さすがに、今回はきついよな」

「確かに。でも、できると思ったけど」

「それはね。まあ、雅ちゃんがそう判断したなら、こっちは従うけどな」

「雅子さんの判断なら、間違いないだろうし」

そんな感じで、避難するようなものはなく、終始和やかな感じだ。

「みんな、ありがとう」

それから、それぞれの分担を決めていく。

「私が全てのラインを総括しますが、ほとんどはラインリーダーに任せます。みなさん、よろしくお願いします。頑張りましょう」

「よし、やったるか」

「これが完成したら、世間をびっくりさせられるぞ」

「やったるか」

それぞれ分担を決め、作業を始めていく。

みんな、すごいな……。

それぞれの担当が決まると、今までよりも順調に仕事をこなしていく。

俺たちは、それぞれから意見を求められれば、疑問に答えていくようなスタンスになる。

結果的に、俺たちは忙しく、あちこちを移動する事になった。

まあ、給料をもらってるわけだし、これは当然だよな。

金額に見合う働きをしないと。

慣れない事に悪戦苦闘しつつ、昼をいくらか過ぎて、ようやく昼休憩となった。

昼は、近くのお弁当屋さんに買い出しに向かう。

さすがに一人で全部は無理なので、俺とキヨカともう一人の三人で向かった。

みんなでお弁当を食べている時も、みんなああでもない、こうでもない議論を交わしている

。

「なんだかすごいね」

「ああ」

俺たちは、圧倒されっぱなしだ。

議論しつつも、食事はきちんと摂っていて、むしろ早い。

俺たちは少し急いで食べる。

それぞれ仕事があるので、片付けは俺とキヨカが担当する。

「ねえ、この中から選ぶとしたら、どれかな？」

片付けが終わったのを見計らって、西部雅子さんが声を掛けてくる。

「えっと……」

そこには、サンプルの皿が並べられている。

全体が黄土(おうど)色……というか、これは金色なのか？ それと、赤い皿や青い皿。緑や黄色といった皿が並んでいる。

それとは別に、縁の部分だけが、さっきと同じ色になっている皿がある。

他にも、それぞれの色で、四角だったり水玉だったり、模様が入ったものまである。

「これがサンプルなんだけど、あなたたちから見て、どれがいいと思う？ なんだったら、他にデザインのアイデアがあれば、提案してくれても構わないわ」

「そうですね……」

目の前の皿をじっと見る。

つうか、こんなに皿を見るなんてなかったからな……。

「これはあまり……だよな」

キヨカがそう言って指したのは、模様のようにになっているものだった。

「どうして？」

西部雅子さんが理由を訊いてくる。

「えっと……なんだか、これだとお鮨(すし)が美味しそうに見えないっていうか……」

キヨカは少し言いづらそうに、口ごもりながら言う。

「なるほど……。そうね。ここにお鮨を乗せるんだもんね。それを考えないといけないってわけか」

「その考えだと、この全体的なものも……」

「どうして？」

「色によっては、食欲がわからないものだってあると思うんです。乗っているネタによっては、美味しく見えないものもあると思うんです」

「なるほどね……。お皿のデザインだけ考えちゃダメって事ね。確かに、ここになにを乗せるのかを考えないといけないわね。そうすると……」

と、西部雅子さんは、縁が塗られたお皿を手にする。

「これになるわけね」

「そうですね。でも、これなんかは、高級感もあって、いいと思います」

と、全体が金色になっているお皿を手にする。

「もうすこし、彩度(さいど)を落とした方がいいとは思いますが、高級なものにだったら、こういう方がいいと思います」

「でも、統一感に欠けないかしら？」

「他のネタとは違うというアピールにもなると思います。やっぱり、差はあった方がいいと思います」

「彼の意見、どう思う？」

今度は、回転寿司を担当しているメンバーに訊く。

「いいんじゃないでしょうか」

「そうですね。おれも、その考えには賛成です」

「私は、統一感があった方がいいと思います」

「そうか？ こいつは別格だってのは、面白いと思うけどな……」

「数える時は、こうして積んでいくんですから、違った方がわかりやすいと思います」

俺の意見の背中を押すようにキヨカが意見を出す。

「……………なるほど」

全員が、キヨカが積んだ皿を見る。

「確かに、これだけすぐにわかるわね。下にあってもわかるし。真ん中は白でもいいわけね」

「だったら、別に縁(ふち)だけでいいんじゃないか？」

「それでも、やっぱり違うぞって感じは欲しいだろ」

「それはそうだけど、縁だけでもいいんじゃないの？」

と、議論はますます白熱していく。

「すごいね」

「でも、楽しそうだな」

言い合っているのだが、喧嘩をしているような風ではなく、相手を尊重しているのがわかる。その上で、自分の意見を言っている。

「言い合いを続けていてもしょうがないわ。これに関しては、私たちだけでなく、実際に店舗の立つ人の意見も参考にして決めましょう。これから、行って意見を聞いてくるから」

あなたたちは、ここに残ってみんなの質問に答えてあげて、と言い残し、西部雅子さんは、サンプルのお皿を鞆に詰め、足早に出掛けた。

「は、はやっ」

あまりの行動力に驚かすにはいられなかった。

「じゃあ、雅ちゃんが出掛ける間は、こっちの仕事をきちんと終わらせないと」

「そうね。帰ってきたら、びっくりさせないと」

そんな事を言いつつ、それぞれの仕事に戻っていく。

「あの……いつもこんな感じなんですか？」

「ん？ どういう事だ？」

気になったので、近くにいた人に訊いたら、不思議な顔をされた。

「明日とかでもいいんじゃないんですか？ 約束もなかったでしょうし、すぐに出掛けるなんて……」

「そんなの当然だろ。明日でもいいなんて、そんなのはないぞ。一日でも早く完成させる。仕事を終わらせる。だらだらとするわけにはいかないからな」

「……………すごいですね」

「そんなもんかね。まあ、まだ学生か？ だったら、そんなもんかね……」

逆に驚かれてしまった。

「ねえ、ちょっといいかしら？」

別のチームから呼ばれたので、そちらに向かう。

今日は、そんな感じであちこちから声を掛けられ、忙しく過ぎていった。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

西部雅子さんが戻ってきたのは、夜も遅くだった。といっても、二二時はあまり遅くないのかな。

「ごめんね。思ったよりも遅くなっちゃった」

戻ってくると、みんながおかえりと迎える。

なんだか家族みたいだな……。

「どれになった？」

「そうそう。気になる」

みんなが群がっていく。

「結果は、縁に色が付いているお皿が採用されたわ」

その結果に、それぞれが頷く。

「そして、一番高価なネタには、あの全部塗られたお皿が採用されました」

そう告げると、あちこちから呟きが聞こえる。それぞれ、思いがあっただけに、色々あるんだろう。

「まあ、決まったものは決まったものだしね」

「さあ、これでデザインは決まったから、あとは大きさや重さね。まだまだこれからだから、頑張りましょう。ただ、今日はもう遅いから、ゆっくり休んで、明日に備えてください」

「じゃあ、今日は帰るか」

「そうね。泊まりもいいけど、今日は家で休みたいかな……」

「おれたちは、呑みに行くか」

「付き合いますよ」

と、わらわらと帰っていく。

「あなたたちは、今日も泊まっていてね。それと夕食は……」

そういえば、まだ食べてなかった。

言われて初めて、空腹だって事に気付いた。

「お腹空いたね……」

「そうだな。お弁当でもいいけど……」

「この時間だと、お弁当屋さんは閉店してるわね」

「ですよ……」

この世界には、コンビニはなかったんだよな。

この時間だと、普通の飲食店は開いてるが、お弁当はない。それに、テイクアウトできる所も少ない。出前は……時間的に行っている店が少ないらしい。

「やっぱり、コンビニがあったらいいよね」

「そうだよな……」

と、俺たちが話していると、西部雅子さんが不思議そうに俺たちを見る。

「あの……。さっきから言ってる、コン……ビニ？ それってなに？」

「コンビニエンスストアって言って、二四時間営業しているお店なんです」

「……二四時間？ それって、ずっとって事？」

「そうです。年中無休です」

「そんなお店があるの？」

「ここでは見かけませんがね」

「年中無休で二四時間……。そんなお店ね……。そこって、なんのお店？」

西部雅子さんが体を乗り出すように訊いてくる。

「雑貨屋なのかな？ 日用品とか、雑誌とか、おにぎりやお弁当。パンとかお菓子とか……」

「デザートもあるよ」

「そうだな」

キヨカが、忘れちゃダメという風に付け加える。

「飲食店じゃないんだ……。二四時間営業か……。しかも年中無休か……」

また、なにか大変な事になりそうかも。

「深夜って、客足が少ないから、それで採算は大丈夫なのかしら。人件費や光熱費もあるし……」

。便利かもしれないけど、企業としては採算度外視じゃないと……」

俺たちの発言をきっかけに、西部雅子さんが腕を組んでぶつぶつと考え始める。

「もしかして、これって……」

「コンビニも考えちゃうのかな」

俺たち、余計な事を言ったのかも。

回転寿司やサウナにジャグジー、コインランドリーも俺たち発信だよな。そこにコンビニか……。

なんだか、俺たちってこの世界にないものを提案しまくって、介入しまくってるけど……大丈夫なんだろうか？

ここって、俺たちの世界じゃないし、歴史だって違うだろうけど、書き換えてるようなものだしな……。

これで、未来が変わったとかなったら……大変だよな。

まあ、具体的にどうなるのかわからないけど。

とにかく、時間警察みたいなのが出てくるのか？

って、そんなのアニメや漫画だけかな。

「これ以上、なにも言わない方がいいかもね」

「そうだな。俺たちの発言で、世界を変えてしまうかもしれないし」

「そうだよね。私たち、歴史を守ってる人たちに捕まえられちゃうのかな」

「……………大丈夫、だと思う」

キヨカも同じような事を考えていたわけか。

漫画やアニメを見て育ったから、そういう考えになるのは当然なのかもな。

でも、本当に大丈夫だろうか。マジで心配になってきたぞ。

とにかく、これ以上はなにもないようにしておこう。

「ねえ、そのお店って、本当に成り立ってるの？」

「えっと……」

答えるべきだろうか。

俺が戸惑っていると、

「まあ、成り立ってるから営業できているんだろうし……。でも、企業や個人の道楽って考えも……。とにかく、検討してみるわ」

なんだか自己完結してくれた。

「ごめんなさいね。夕食だったわね。遅くなっちゃったから、材料があまりないけど、適当に作るわね」

そう言って、西部雅子さんはキッチンに向かう。

「私も手伝います」

キヨカが慌てて追いかける。

俺は……手伝う事もできるのだが、なんとなく行きそびれてしまった。

「このままでいいのかな……」

神様(神崎会長)や椎崎(しいざき)さんに訊いてみたいけど、連絡のしようがないからな……。

でも、もうここまで言ってしまったものはどうしようもない。

これ以上、新しいものを言わないようにしよう。

そんな決意を固めていると、キッチンの方からいい香りがしてきた。

「お待たせ」

その声でキッチンに向かうと、野菜炒めを盛った大皿がテーブルに置かれている。

こんなものしかできなかつたけど……なんて言われたが、充分すぎるくらいだ。

「ご飯は朝の残りを冷凍していたものね」

と、キヨカがお茶碗に入れて持ってきてくれた。

「ありがとう」

それぞれ揃って、三人で食べる。

食べている間は、ずっとコンビニの話だった。

こういう食事ばかりな気がしてきた。

でも、今までなかった新しいものが楽しいっていうのはわかるからな……。

それに夢中になっても、なんら不思議はない。

食事が終わると、昨日と同じく銭湯に行って、戻ってきて就寝。

ちなみに、明日は休みらしい。

平日は、ひたすらそれぞれのラインに分かれての作業だ。
毎日毎日、俺たちは忙しくしていた。
そんなこんなで、あっという間に一週間が過ぎていた。
こんな事をしていると、本来の目的を忘れてしまっている。
そうそう、俺たちは回転寿司を作るためにこの世界にいるんじゃないって――

なんだか薄暗いな……。

できあがってきた、回転寿司の白い皿の山を前に、そんな事を考えていると、
「なんだか、暗いわね」

と、西部雅子さんが窓の外を見る。

外は、今にも雨が降りそうな感じで、どんよりとしている。

空もそうだし、街の様子もなんだか薄暗い。

そのせいか、みんなも暗くなっている気がする。気のせいだろうか、活気がない。

それでも、それぞれの仕事を黙々と進めている。ただ、やっぱり会話が少ない気がする。

誰かが灯りを点けるが、やっぱり薄暗い。

なんだか世界が重い。

それでも、仕事をしないわけにもいかず、淡々とこなしていく。

なんだろう。

急に暗くなった気がする。

こんなどんよりとした空気は初めてだ。

この世界に来てからずっと、活気があって賑やかで明るかった。

それなのに、今はまるで正反対だ。

キラキラとしたネオンが印象的だった。まあ、来た時が夜だったせいもあるんだろうけど。それも、今ではチカチカと点滅しているだけだ。

なんだか、世界全体が落ち込んでしまった。そんな印象を受ける。

「どうしちゃったんだろうね」

キヨカが小声で訊いてくる。

「そうだよな。連日、休みなしで疲れてるってわけでもなさそうだし」

それならそれでいいんだろうけど、街全体がっていうのはおかしい。

「それにしても、こんなに白いお皿があると、すごい光景だよな」

「そうだな」

回転寿司でバイト経験があるならまだしも、一〇〇枚を超える枚数の皿を見る事なんか、まずないだろう。

色指定を終えたサンプルが目の前にある。

実際の店舗は、この一〇〇倍以上の皿が必要になるのだが、まずはこれだけでシミュレートし

てみようとなったわけだ。

それにしても、一週間でこんなにできるもんなんだな。

もちろん、量産には時間が必要だろうが、俺の常識から考えると、これはありえない早さだろう。

たったの一週間で、回転寿司の皿やレーンの試作品が完成……。この世界はすごいな。

レーンと皿の相性は確認済み。

あとは、実際に鮓を置いてみた時の感じ。それと、洗浄のしやすさなどを確かめる必要があるらしい。

「じゃあ、これで実際に使用してみて、最終決定としたいと思います」

最終的に判断するのは、実際に使用する人が決めなければならない。

というわけで、あの鮓屋へ行くわけだが、今日は休日という事もあり、この時間は店が忙しく、抜けるわけにはいかないらしく、実際に判断してもらうのは翌日の朝となっている。なので、とりあえずはここまでだ。

やっぱり、休日だと思ってしまうようには進まない。

それでも、みんながこうして出社するのは、この作業が楽しいからなんだろう。実際、楽しそうだったもんな。今日はなんだかおかしいけど。

なんだか暗い気分のまま、できる範囲の仕事をこなしていると、時間は過ぎていく。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「なに、あれ」

そんな声で、場の空気が変わった。

俺たちは、職場のみんなと一緒に、近くの食堂で夕食を食べていた。

その時、店内に設置されているテレビに、全員の視線が釘付けになった。

さっきまで、適当なバラエティ番組を放送していたのだが、緊急ニュースとかで画面が変わった。

「……………おいおい、あれって本当か？」

「特撮じゃないの？」

「でも、ニュースだろ、これ」

「なにかの悪ふざけ？」

そんな声が、あちこちのテーブルからあがる。

それもそのはずだ。

どこかの大きな建物に、巨大な細長い生物が張り付いている。

細長い体からは、さらに細長い脚が伸びていて、それでがっしりと建物を掴んでいる。

「トールちゃん……」

「ああ……」

だが、俺たちはそれを知っていた。

いや、その姿を見たのは初めてだが、それがなんなのかの見当がついた。

「アーちゃん」

キヨカが左手に話し掛ける。

他の人が見たら、なにをしてるんだろうと思うだろう。だが、俺たちは違う。

「蟲(ベステート)なり 相違(そうい)なく蟲(ベステート)なり、

蜘蛛(アラネーオ)の言葉に、背筋が凍った。

「キヨカ」

「トールちゃん」

俺たちは、急いで向かおうとして……、

「場所はどこだ？」

「そうだ」

画面を見る。

暗くてよくわからない。そもそも、この世界の場所はよくわからないので、わかる場所なんてないんだけど。

「すみません。ここってどこですか？」

西部雅子さんに訊く。

「ここ？ えっと……もしかして、このニュースの場所？」

「はい」

真っ直ぐに見る。

「俺たちは、こいつを追って旅をしてるんです」

「……………嘘、でしょ？」

「嘘でも冗談でもないんです。私とトールちゃんは、本当に……」

「ちょっと……………。そんな冗談……………」

信じられないのは当然だ。

俺だって、いきなりこんな事を言われたら、冗談としか思わないだろう。

だが、真実だ。

「……………本当、なの？」

俺たちは揃って頷く。

「この場所に行かなくちゃいけないんです」

「だから、教えて下さい」

俺たちの懇願(こんがん)に、戸惑いながらも西部雅子さんが口を開いた。

「ここは……………あなたたちが、最初にいた駅の近くのデパートよ」

「デパート……………」

デパートといえば、ひとつしか思い出せない。間違えようもなく、あのデパートだ。

やっぱり、あの近辺に潜んでいたんだ。

「トールちゃん、急ごう」

「ああ」

テレビを見ると、警察がデパートを包囲している。しかし、なにもできずにいるようだ。

当然だ。

あんなものを相手にするような組織じゃない。

警察はあくまでも対人組織だ。

それは、おそらく自衛隊もそうだろう。

しかし、テレビからは、自衛隊にも出動命令が出たと報道している。

無理だって。

人以外を相手に、どうしようっていうんだ。しかも、街中で。

でも、もしかしたらどうにかできるかも、なんて思ってしまう。

「行こうよ」

「そうだな」

つい立ち止まって見てしまっていた。

急いで電車に乗って……………。

「電車ならおそらく無理よ。止まっているみたいだから」

西部雅子さんが追いかけてきた。

「タクシーで行きなさい。すぐに呼ぶから」

そう言いながら、店内の電話からタクシーを呼んでくれている。

「トールちゃん」

「ここは、その通りにしよう」

うん、とキヨカが頷く。

タクシーが来るまで、じっとしているのがもどかしい。

「トールちゃん、風伯(ふうはく)は？」

キヨカがそれに気付いた。

「しまった……」

あまりに平和に慣れていた。そして、忙しさを理由に忘れていた。

絶対に肌身離さず持っていないといけなかったのに。

荷物もそうだが、いざという時に対処できないと意味がない。

「すぐ取ってくる」

「待って。タクシーで行こう」

「いや、取ってくる。キヨカはここにいて、俺を回収して一緒に行こう」

「ダメだよ。私たちは、ずっと一緒にいないと」

「……………」

そうだった。

俺たちは、別々に行動するわけにはいかない。

ちくしょう……。

なんだか焦(じ)れたい。

「来たっ」

すぐにタクシーが到着した。

「すみません」

俺たちは急いで乗り込み、行き先を告げる。

「お客さん、ちょっとそれは難しいんじゃないかな」

行き先を告げると、運転手さんは渋い顔をする。

「どうしてです？」

「あのニュースでしてるデパートだろ？ あの辺は、交通規制されてると思いますよ」

「……そうですね」

考えればそうだ。

一般人が近付けるはずがない。

だが、行かないわけにはいかない。

「とにかく、発車して下さい。そして、できるだけ近くまでお願いします」

「了解しました」

運転手さんはタクシーを発進させる。

「すみません。ちょっと行ってきます」

「あいつを倒したら、また戻ってきますね」

「……………うん」

西部雅子さんは、どうしていいのかわからない顔をしていた。それでも、俺たちを見送ってくれた。

「すみません。ラジオいいですか？」

「あ、はい」

車内ではラジオで情報を得る必要がある。

「あのニュースでいいですか？」

「はい」

音だけだと、様子が分かりづらいが、それでもなにもないよりはいい。

警察や自衛隊がどう行動するのか、知っておきたい。

「大丈夫、だよね」

「俺たちがするしかないだろ」

「そうだね」

事務所に寄って、風伯を回収。そして、次はいよいよ現場だ。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

案の定、道路は混雑していた。

逃げようとする車。俺たちのように近付こうとする車。

近付こうとしているのは、おそらく野次馬だろう。

なかなか車が動かないのがもどかしい。

この混乱のせいで事故でも遭ったのか、警察が交通整理をしている。

信号らしきものが、白い光を点灯したり、明滅したりを繰り返している。その下で、景観が白い旗を持って交通整理をしている。

完全に交通は麻痺しているようだ。

車は全くといっていいほど進まない。事実、歩道を歩いている人たちの方が速い。

「すみません。ここからあのデパートって、あとどのくらいですか？」

もし近いようなら、ここで降りた方が早い。

「そうですね……一駅くらいでしょうか」

「一駅……。歩いたら、どのくらいになりますか？」

「さてね……。おそらく、一五分くらいじゃないかな」

「ありがとうございます。あのデパートは、この道を真っ直ぐでいいんですか？」

「そうだけど……もしかして」

「ここで降ります。ありがとうございます」

キヨカの意思を確認もせずに決めただけ……いいよな。

「トールちゃん、行こう」

と、キヨカが既に降りる気だ。

「じゃあ、ここでいいです」

と、壱万円札を運転手さんに渡す。これで足りるはずだ。

お釣りなんかは無視して、俺たちはタクシーを降りる。

「ちょっと、お客さん、お釣り……」

そんな声が聞こえるが、それに構っている余裕はない。

「トールちゃん、人がいっぱいだよ」

「そうだな」

周囲には、車もそうだが、人が溢れている。

さすがに都会なんだろうか。

元々多いのに、さらに集まってきている感じだ。

どうするか……だな。

蟲(ベステート)の相手をするには、どうしても周囲に被害が出てしまう。

「考えてられるか」

そんな余裕はないな。

「キヨカ、蜘蛛(アラネーオ)を頼む」

「えっ？ アーちゃん？」

いきなりで驚いているようだ。

「このままじゃ、俺たちも身動きがとれないし、警察に止められる。だったら、蜘蛛(アラネーオ)に道を作ってもらおうぜ」

「……………なんだか、アーちゃんが可哀想だよ。……でも、それしかないよね」

「すまん。蜘蛛(アラネーオ)、頼む」

「了承した、」

蜘蛛(アラネーオ)の声が聞こえる。

「ありがとう」

蜘蛛(アラネーオ)の了承は素直に嬉しかった。

「じゃあ、いくね」

キヨカは、左手の透明のオープンフィンガーグローブを外す。

蜘蛛の形をした痣(あざ)が直接現れる。

そして、八角形を描き対角線を描く。

すると、その痣がむくむくと動くように見え、飛び出した。

飛び出したそれは、巨大な蜘蛛の姿となる。

「うわあっ！」

「きゃあっ！」

「なんだ、これ」

「ここにもいるぞ」

俺たちの近くにいた人たちが、突然現れたそれに驚く。

説明する必要も、誤魔化す必要もないな。

「汝(なんじ)たちは我に乗れ、」

しかし、蜘蛛(アラネーオ)のその言葉に、俺はちょっと引いた。

「マジかよ……」

俺としては、蜘蛛(アラネーオ)に先行してもらって、人が避けた場所を通るくらいのつもりだったんだがな……。まさか、蜘蛛(アラネーオ)に乗るなんて、考えもしなかった。

「トールちゃん、行くよ」

キヨカはなんの躊躇いもなく乗る。

「ちょっと待てよ」

乗れって……。蜘蛛だぞ。

ちょっと怖いだろ。いや、かなり怖い。

「トールちゃん、なにしてるの」

「あ、ああ」

キヨカに急かされ、決意を固める。

「よ、よし」

ええい、ままよ。思い切って、蜘蛛(アラネーオ)に飛び乗る。

「アーちゃん、行こう」

了解した、

周囲の騒ぎを無視して、蜘蛛(アラネーオ)は人を無視して進んでいく。

下の方からは、驚きの声が聞こえてくる。

交通規制のせい、車は止められている。そのお蔭で、走りやすくなっている。しかし、車両はあるし、そこには人もいる。決して走りやすいわけではない。

「アーちゃん、一気に行くよお！」

キヨカの声に応えるように、蜘蛛(アラネーオ)はその速度を速める。

「お、う、うわっ」

急に速くなって、落ちそうになるのだが、しがみつこうにもそんな場所はない。

蜘蛛(アラネーオ)は、車を飛び越えるように、その隙間を器用に走る。脚があればだからな……。

そのせいもあって、騒ぎはだんだんと大きくなっていく。

自分が騒がれる側なわけだが、その気持ちはよくわかるぞ。いきなり、三メートルはある蜘蛛が現れたら、驚くに決まってる。それが当たり前の反応だろう。

「もう、ちょっと、安全に」

「トールちゃん、急がないと」

「わかって、る、けど」

振り落とされそうさ。

黙視確認、

「トールちゃん、いた」

「あ、ああ……」

落ちそうになりながらも、デパートに張り付いている蟲(ベステート)を確認した。

「でかいな……」

改めて見ると、そいつはかなりの大きさだった。

この三メートルはあるだろう蜘蛛(アラネーオ)なんか、小さく思えてしまう。

一〇階くらいあるデパートの建物と同じくらいだ。

ただ、その体が細い棒のようなので、まだ威圧感は少ない。それでも、充分過ぎる存在感だ。

「行くよお」

蜘蛛(アラネーオ)は人混みを無視して進む。

やがて、警察が俺たちに気付いた。

「止まれ！」

制止の音が聞こえるが、そんなものは無視だ。

蜘蛛(アラネーオ)は蟲(ベステート)に向かって突き進む。

暗いせい、それとも蜘蛛(アラネーオ)に圧倒されているからか、警察は俺たちには気付いていないようだ。

それにしても、発砲してこないのは助かった。まさか人がいるなんて思っていないだろうから、発砲されたら無事でいられないかもしれない。

警察は未知の巨大生物には慎重らしい。そのお蔭で助かった。

「アーちゃん、お願い」

デパートが近付くと、キヨカが合図をする。

すると、蜘蛛(アラネーオ)は跳躍した。

「いっ、う、うわあっ！」

事前に言えっの。

キヨカと蜘蛛(アラネーオ)は念話というか、通じ合ってるので、言葉がなくても大丈夫らしいが、俺は無理だぞ。

「キヨカ、こういうのは先に言えよ……」

跳んでしまうと、滞空中は安定する。

「ごめんごめん。つい」

つい、じゃねえ。

「……………って、うわあああああっ！」

忘れてた。

跳んだら落ちるんだ。

蜘蛛(アラネーオ)はデパートのすぐ傍に着地する。

「うおっと」

着地の衝撃で落ちそうになる。

「トールちゃん、もっとちゃんと乗らないと」

「無茶言うなって」

どうやったら、ちゃんと乗れるんだよ。つうか、キヨカがおかしいだろ。なんで、こいつはこんなに安定してるんだ？

「ほら、行くよ」

そんな事を考えていると、キヨカはするすると蜘蛛(アラネーオ)から降りていく。

「おい、待てよ」

慌ててそれを追う。

すとんと降り立つと……。

「うっわあ……」

周囲は物々しい。

デパートの建物を囲んでいる警察。

俺たちはデパートの前にいるわけで……。

「なんだか、私たちが指名手配されてるみたいだね」

暢気(のんき)だな。

確かに、そうなんだよな……。俺たちも囲まれている。

「君たち、なにをしてるんだ。離れなさい」

ようやく、俺たちを認識したらしい。

しかし、それに従うわけにはいかない。ひたすら無視だ。

「キヨカ、蜘蛛(アラネーオ)を頼む」

「頑張ってね、トールちゃん」

「なんとかしてみる。蜘蛛(アラネーオ)、あいつを剥(は)がせるか？」

「了解した、

なんか答えになってない気もするけど……いっか。

「頼む」

その声と同時に、蜘蛛(アラネーオ)が飛び跳ねる。そして、向きを変えると糸を出し、蟲(ベステート)に絡ませる。

「よし」

その行動に、周囲の警察が動揺する。

まさか、目の前で巨大な存在同士が、争うなんて考えてもなかつただろう。それこそ、特撮だ

。

しかし、これはそうじゃない。

実際に目の前で起こっている。

怪獣映画の登場人物になった気分だ。

しかし、蜘蛛(アラネーオ)と蟲(ベステート)との大きさが違いすぎる。

蜘蛛(アラネーオ)は、糸を利用して器用にかわしているが、いかんせん相手が大きすぎて、その糸も蟲(ベステート)に断ち切られてしまう。その上、有効な攻撃が決まらない。

どうにかして、俺も闘いに参加したいが、デパートに張り付いたままだと、手も足も出ない。っていうか、出せない。

「どうすりゃいいんだ」

結局、蜘蛛(アラネーオ)に任せるしかないのか？

それじゃ、俺がここにいる意味がないじゃないか。

風伯を抜いたのが無意味だ。

完全な役立たずだ。

どうする……。

どうすればいい……。

「アーちゃん、頑張って」

キヨカが声援を送る。

キヨカも一緒に闘っている。なのに、俺は……。

ふと周囲を見ると、警察はさっきよりも距離をおいている。

どうやら、この闘いに巻き込まれないように避難しているようだ。

そりゃそうか。所詮は対人組織。こんなのは仕事にない。

「ここからなにかできないか……」

ここからできる事。

……ダメだ。なにも思い浮かばない。

見ているしかできないのか。

「アーちゃん、もう少しだよ」

その声に蜘蛛(アラネーオ)を見ると、もう少しで蟲(ベステート)を建物から剥がすところだった。

「おおっ」

俺がうじうじしている間も、蜘蛛(アラネーオ)は全力で闘っていたんだ。

「俺がするべき事は……これだな」

風伯を構える。

いつでもいいぜ。

そんな俺の気持ちに伝えるように、蜘蛛(アラネーオ)がついに蟲(ベステート)を建物から剥がした。

「よしきた……って、ちょっと待て」

デパートと同じくらいの長さが、ぱたりと倒れてくる。これは、ちょっとまずいんじゃないか？

「キヨカ、離れろ」

俺はキヨカを抱えて、その場を離れる。

「待避っ！ 待避っ！」

周囲を囲んでいた警察も、それぞれに避難を始める。

それは、その外にいた野次馬たちも慌てて離れていくが、こちらはパニック状態だ。あちこちで転倒しているようだ。

ご愁傷様。

「トールちゃん、ありがとう」

幸いな事に、蟲(ベステート)の体が細かったので、俺たちはなんとか避ける事ができた。

しかし、長さがあるので、街に被害が出ている。

道路の方に倒れたが、それでも周囲の建物を破壊している。

蜘蛛(アラネーオ)は、蟲(ベステート)に巻き込まれないように、横に跳んでいたのも、その着地点にあった建物を少し破損させた。

これって、俺たちが弁償か？

ちょっと無理だぞ。

……って、今はそれどころじゃない。

そんな事を気にしながら闘うなんて、できるわけないしな。

そもそも、こんな巨大なものが暴れてる時点で、どうしようもないだろ。

「キヨカ、行ってくる」

「頑張れ、トールちゃん」

おうよ、と手を挙げて蟲(ベステート)に向かって駆けていく。

倒れていても、蟲(ベステート)の迫力はすごいものがある。

正直、怖いよな……。

それにしても、妙に静かだ。

まあ、蟲(ベステート)が倒れてみんな逃げたからな。

もしかしたら、巻き込まれた人がいるのかもしれないが、ここからじゃわからない。

とにかく、倒れている蟲(ベステート)に斬りかかる。

「っ！」

ガキッと跳ね返される。

「硬い……」

ビリリと痺れる。

なんつう体だ。

まあ、あの長さを支えるには、この外殻(がいかく)は必要だと思うけどさ。

それにしても、ここで風伯が通用しないと、俺の立つ瀬がないじゃないか。

なんのために、俺がいるんだよ。

こんな巨大なものを相手に、まともに闘えるとは思ってなかったけど、なにかしらできないと、意味がないだろ。

「退避せよ、

「なっ……」

蜘蛛(アラネーオ)の声がして、慌ててほとんど反射的に離れる。

と――

「がっ」

突然、大きな衝撃があって、吹っ飛ばされる。

やばい。

このままだと、死ぬかも……。

すまん、キヨカ。

完全に死を覚悟した。

漫画とかアニメだと、壁にぶつかっても大丈夫だったり、めり込んでも無事だったりするけど、実際にあんな事があるはずがない。普通は死ぬぞ。

しかし、そうはならなかった。

どこかの壁か地面に叩きつけられると思ったら、なにやらクッションのようなものに受け止められていた。

「……………？」

なにが起きたのかわからなかった。

どうやら、俺は生きているらしい。

「トールちゃん、大丈夫？」

キヨカが青い顔で駆け寄ってくる。

「……キヨカ？」

なんだか実感は微妙だが、キヨカがいるって事で、あの世じゃなくて、この世だって事の証明になるだろう。

「トールちゃん、大丈夫？ 痛くない？」

おいおい、泣きそうな顔しやがって……。っていうか、泣いてないか？

なんだか、キヨカが泣くなんて珍しいじゃないか。

「トールちゃん？ 大丈夫なの？」

くしゃくしゃになった顔が面白かった。

ははは、と濁いた声で笑う。

「どうしたの？ 壊れた？ ……………でも、大丈夫なんだよね」

と、傍(そば)まで来た途端に、その場にへなへなと崩れる。

「どうしたんだよ……」

「心配したよ……」

ぽかぽかと叩かれる。

ったく……なんだよ。

地味に痛い。

くっと体を起こそうとしたけど、思うように起き上がれない。

そういや、俺って今どうなってるんだろう？

後ろを振り返る。

そこには、なにか網のようなものがある、どうやら俺は、それのお蔭で助かったらしい。確かに、これがなかったら、後ろのビルに叩きつけられていて、生きていなかったかもしれない。

「これって……」

「トールちゃん、アーちゃんにお礼言わないと、だよ」

「……蜘蛛(アラネーオ)に？」

どういう事なのか、うまく考えられない。

ちなみに、蜘蛛(アラネーオ)は今、蟲(ベステート)に糸を吐きかけてぐるぐる巻きにしている。

蜘蛛(アラネーオ)の糸……。

これって……。

俺を支えてくれているものと比べる。

「アーちゃんの糸がなかったら、トールちゃんがどうなったか……。本当によかったよ」

キヨカが俺にしがみつく。

どうやら、これは俺が思っているものであっているようだ。

「アーちゃんがね、今は少し離れてるって。アーちゃんがなんとかするってさ。トールちゃんは、ここでおとなしくしてて」

「えっ？」

ちょっと待てよ。

これじゃ、俺って足手まといじゃないか。

役立たずどころじゃなく、お荷物だろ。

でも、実際にその通りなんだよな。

ちくしょう……。

精神的にも立ち上がれない。

ふて腐れ気味の俺の目の前で、蜘蛛(アラネーオ)は蟲(ベステート)をぐるぐる巻きにし終える。
蟲(ベステート)は糸でくるまれ、まるで繭(まゆ)のようになっている。

蟲(ベステート)は、その繭から逃げようと、もがいているようだが、蜘蛛(アラネーオ)の糸はなかなか切れないようだ。

ゝ資格者(ティトロン)よ 蟲(ベステート)を封印せよ、

蜘蛛(アラネーオ)の声にキヨカがすっと立ち上がる。

「蟲(ベステート)を封印する。蜘蛛(アラネーオ)よ、蟲(ベステート)を喰らえ」

キヨカが蜘蛛(アラネーオ)に告げる。

ゝ了解した、

キヨカの言葉通り、蜘蛛(アラネーオ)はぐるぐる巻きにした蟲(ベステート)を食べ始めた。

「うっ……」

その光景に、思わず口元を押さえる。

なんだ、これ……。

これが封印だったのか？

ばりばりと蟲(ベステート)を喰らう蜘蛛(アラネーオ)。

こんな光景を、これからも見ていくのか？

俺の不安や心配をよそに、キヨカは平然とそれを見ている。

なんだ、こいつは。平気なのか？ ある意味では、自然界の摂理かもしれないが、これはそれだけですまされるものじゃないだろ。

パラパラと上から音がしたので見ると、ヘリコプターが飛んでいた。

テレビ中継か？ それとも、警察のヘリか？ どっちでもいい。でも、テレビ中継だとしたら、この光景が放送されてるって事だろ？ こんなのを、多くの人が見てるなんて、そんな事を考えただけで、どうしようもない気持ちになる。

俺たちのせい——いや、俺のせいなんだよな。

封印を解(と)いてしまった者の責任。

そして、選ばれた者の責務。

だから、俺はこれを受け止めないといけない。

でも、これを直視する事はできない。

目を逸らしていても、音は届いてくる。

バキョバキョという感じの音が聞こえてくる。

「アーちゃん、お疲れ様。ありがとう」

どのくらいだろうか。数時間？ いや、数分だったろう。

気が付けば、音はしなくなっていた。

「トールちゃん、終わったよ」

ぽんと肩を叩かれた。それでようやく、見る事ができるようになった。

そこには、瓦礫(がれき)の山と蜘蛛(アラネーオ)がいた。

「終わった……のか？」

今一つ実感がない。

そもそも、俺はなにもできちゃいない。

足手まといになっただけだ。

キヨカも護(まも)れない、それ以前に、自分の身だって……。

じいさんがいたら、ポコポコにされてるだろうな。間違いなく。

ちくしょう。

なんて無力なんだ。

俺がいる意味って、なんだろうな。

「ありがとう、アーちゃん」

蜘蛛(アラネーオ)はキヨカの手に戻っていた。それをキヨカが撫でる。

「助かったよ。ありがとう」

俺もお礼を言う。

「そうだよ。トールちゃんは無茶をしちゃダメなんだからね」

「無茶って……。俺はなにもできないっていうか……」

「確かに、トールちゃんはなにもできなかったね。アーちゃんに助けてもらわなかったら、どうなってたかわからないもんね」

ズバズバと言われると、わかっていても傷つく。

「でもさ。やっぱりあれは無理だよ」

無理。

そんな一言で諦めたくない。

資格者(ティトローン)のキヨカは、存在する意味がある。この旅をする理由がある。

だけど、俺はどうなんだろう。

確かに四刀(しとう)を抜けたけど、それだけだ。使えなかったら意味がない。

「強くなるよ」

「ん？ どうしたの？」

「強くなる」

「トールちゃんが真面目になってるよ。それって、なんだか不気味だよ」

「おいおい。せっかくやる気になってるのに、それはないだろ」

「そうだね。強くなって、私を護ってもらわないとだもんね」

「.....そうだな」

「うわっ。真面目だよ。そこは、自分は自分でなんとかしろ、とか言わないと.....」

「いや、この前もだったけど、俺ってなにもできてないわけだよ。それじゃ、やっぱりダメだっ
て思ったんだ。でないと、俺はただのお荷物だろ」

「真面目モードはやめようよ。トールちゃんが一緒だから、こうして旅をしてるんだし」

「真面目にもなるっての」

「じゃあ、真面目モードはここまでね。この世界の蟲(ベステート)を封印したから、次の世界に行
こうよ」

「.....そうだな」

ここでのすべき事は終わったんだ。

回転寿司とか、サウナとか.....色々と終わってないけど、それは俺たちがすべき事じゃない

。

「どうする？ このまま.....は無理だよな。やっぱり、ちゃんとお別れしないとね」

「そりゃそうだろ。お世話になりまくったしな」

「で、真面目な話なんだけど、どうする？」

「どうするって、なにがだ？」

それだけでわかるわけないだろ。

「今日は、こっちに泊まる？ それとも、もうすぐに出発する？」

「そういう事か。そりゃ、すぐに次の世界に行くのがいいんだろうけど.....」

なんとなく、無言で見つめあう。

「疲れたし、寝ようか」

「そうだな」

俺たちの意見は一致した。

正直、疲れてる。

それに、吹っ飛ばされた痛みが残っている。

だから、すぐにでも休みたい。

「そうと決まれば、さっさと戻るか」

「.....そうだね」

と、ようやく周囲に気付く。

封印が終わって安心してたが、周囲には警察が.....。

蟲(ベステート)の姿がなくなって、野次馬たちも騒ぎだしている。

ここにずっといると、色々とややこしくなるのは確実だ。

「キヨカ、行くぞ」

「うん」

俺がキヨカの手を引いて走るのが普通なんだろうけど.....逆だった。

なにせ、俺はボロボロの状態だ。走るのも一苦勞。というわけで、キヨカに引いてもらって、

ようやく走れている。

ああ、最後まで情けないな。

警察はこの状況の收拾をつけないといけないので、てんやわんやとなっていたのが幸いして、俺たちは気付かれる事なく逃げる事ができた。

そりゃ、瓦礫(がれき)の山だもんな。

まさに、怪獣が争った後だ。

近付いてくるのも大変な状況だ。

それは、俺たちが逃げるのも大変だって事なんだがな。

足場が悪い中、ようやく離れる事ができた。

そこで、偶然にもタクシーを発見。それに乗って、元の場所に戻ってくる事ができた。

みんなで夕食を摂っていた食堂に戻ってくると、みんなが出迎えてくれた。

「おい、お前たち大丈夫か？」

「大丈夫だった？ 怪我はない？」

「無茶しやがって」

「すごかったぞ」

いきなり、みんなが抱きついてくるもんだから、節々が痛い。

俺たちは、みんなにもみくちゃにされる。

「ちょ、ちょっと……」

「あ、あの……」

熱烈歓迎なのはいいんだが、蟲(ベステート)に吹っ飛ばされたので、それがかなりのダメージになる。

「ちょっと、そんな風にしたら、二人だって困るでしょ」

「そんな事言って、雅ちゃんだってしたいでしょ」

「そうだぞ。出遅れたからって、それはないよなあ」

「ああ、そうだそうだ」

せっかく止めようとしてくれたのだが、みんなのテンションには勝てないらしい。

「うっ……」

「トールちゃん……」

ほぼ無傷のはずのキヨカも、かなり苦しそうだ。

確かに、こんな風にされる事ってないし、そもそも全力で抱きつかれると、かなり体力を消耗する。

マジでそろそろ……。

一気に体力を消耗して、気が遠くなりかけた時、

「みんな、やめなさいっ！」

西部雅子さんの一喝が響いた。

店内にいた全員の動きが止まった。

「はあ、はあ、はあ……。みんな、もうちょっと落ち着きなさいって」

その声で、ようやく俺たちは解放されたわけだが……。既に体力は残されていなかった。

そのまま、俺たちは力尽きて、だらりとその場に崩れていった。

「ちょ、ちょっと。大丈夫？」

俺たちは、みんなに介抱される事となった。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

目を覚ました時、外は明るかった。

ゆっくりと目を開ける。

どこだろう……。

そんな事を考えたが、すぐにわかった。

ここ一週間、ずっと眠っていた場所だ。

あれから記憶がないのだが、どうやら俺たちはここに運ばれてきたらしい。

ゆっくりと体を起こそうとすると、ズキリと節々が痛んだ。

別に怪我はしていないはずだ。

まあ、痛みの感じからして、筋肉痛みたいなもんだろう。

じいさんとの修行中にも、よくこんな事があった。

俺は、結局まだまだ未熟者ってわけだ。修練が足りていない。

この旅が終わる頃には、少くく成長できていたらな……なんて考えながら、ベッドから起き上がる。

隣のベッドでは、キヨカがすぴすぴと眠っている。

「まあ、大変だったもんな」

俺には実感できないのだが、蜘蛛(アラネーオ)を召還して闘うと、精神的に疲れるらしい。別に魂を喰われるとかじゃないのだが、集中していないといけないとかで、そうになってしまうんだそうだ。

「まあ、今日はこのままにしておくか」

普段なら、無理にでも起こすんだが、さすがに今日はそっとしておこう。

それにしても、今は何時だ？

ぐるりと首を動かして、壁掛け時計で時間を確認する。

「うっそ……」

時計の針は、もうすぐ三時になろうとしている。

窓の外は明るい。この明るさは、照明のものじゃない。つまり、この三時は深夜じゃなくて、昼間って事になる。

この時計が間違っていなければ、俺たちは半日以上眠っていた事になる。

「マジかよ……」

そんなに眠ってたなんて……。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「……はい」

そのノックに返事をする。すると、そろりとドアが開いて、隙間から西部雅子さんが顔を覗かせた。

「起きてる……？」

ゆっくりとドアを開けて、小声で確認してくる。

「すみません。おはようございます」

俺が体を起こしているのを確認して、西部雅子さんの表情が明るくなる。

「よかったあ」

駆け込むように入ってきて、がばっと俺に抱きつく。

「あ、あの……」

なんだ？ どうなってるんだ？

えっと……。俺はどうしたらいい？

女の人に抱きつかれるのって、初めてかもしれない。

こういう時って、どうしたらいいんだろう？ 俺も抱き返すのがいいんだろうか。

いやいや、それはないだろ。

「よかった。本当によかったよ」

さらに強く抱き締められる。

「あ、あの……」

俺が戸惑っていると、

「あ、ごめんなさい。彼女はまだ眠っていたわね」

と、小声で謝られた。

いや、それはそうですけどね。

「彼女も早く目を覚ますといいけど、とにかく目を覚ましてくれてよかったわ。このまま、眠り続けてしまうんじゃないかって、心配したんだから」

そう言う西部雅子さんは、今にも泣き出しそうだった。

「あの……ありがとうございます。あの後、覚えてなくて……」

「そんなのいいのよ。とにかく、目を覚ましてくれてよかったわ」

「んっ……んん」

どうやら、キヨカが目を覚ましたらしい。

「彼女も起きるみたいでよかった……」

その様子を見て、また涙ぐんでいる。

ああ、そんなに心配させちゃったんだな。

いきなり倒れるように眠ったしな。それに、あんな事の後だし。

キヨカはもぞもぞとして、ゆっくりと目を開ける。

「……………ん？ ………………んあ？」

間抜けな声と一緒に、ゆっくりと体を起こす。

「おあよう、トールちゃん」

目をこすりながら、欠伸をする。

「おはよう、キヨカ」

「おはよう」

まだ起ききっていないのか、どこかぼんやりとしている。

「二人とも、起きてよかった……」

がばっと西部雅子さんがキヨカに抱きつく。

「えっ？　へっ？　はう」

いきなりの事に、キヨカは目を丸くしている。そして、どうしていいのかわからず、手をわなわなとさせている。

俺もこんな感じだったんだろうな。少し前の俺がそこにいた。

ひとしきり抱きつくと、西部雅子さんはキヨカを解放する。

「よかったわ……二日以上眠ってるんだもん。もう、起きないんじゃないかと思ったわよ」
……………？

えっ？

ちょっと待て。

今、なんて言った？

俺たち、半日くらい眠ってただけじゃないのか？

二日以上？

どうなってるんだ？

なんだかパニックになって、俺はまた気を失うかと思った。

「起きたのか？」

その声を筆頭に、わらわらとみんながなだれ込んできた。

もしかして……………。

そして案の定、俺たちはもみくちゃにされたのだった。

ようやく落ち着いて、詳しい話を聞くと、どうやら俺たちは二日以上眠っていたらしい。

蟲(ベステート)と闘ったのが日曜の夜で、今日は水曜の昼間らしい。

実感はないんだが、どうやら本当にそうらしい。

まさか、二日以上眠ってたなんて思いもしなかった。

あれから街は大騒ぎだったらしい。

デパート周辺は、瓦礫(がれき)の山となっているらしい。周辺にも、かなりの被害があったようだ。

そして、警察は俺たちを捜しているとか。

みんなが黙っているので、俺たちの身元はバレてないらしい。その辺は、相談するまでもなく、全員一致で俺たちを匿(かくま)うと決めたようだ。

そのお蔭で、俺たちはこうして平穩に眠っていられたってわけだ。

「ありがとうございます」

その事には、純粹にお礼を言う。

「別に、当たり前だろ」

「そうだぞ。お前たちを差し出すなんて、するわけないだろうが」

「嘘言え。お前は、英雄を祭り上げようとか言ってただろ」

「おいおい、そんな冗談に決まってるだろ」

「どうだか」

そんなやり取りが嬉しかった。

みんな、いつも通りだ。

あんな事になったから、俺たちを不気味に思って、遠ざかってしまうかもって思った。だけど、こうして、今まで通りに接してくれている。

それが無性に嬉しかった。

「トールちゃん、私たちこのままでいいんだよね」

キヨカも同じ思いのようだ。

「ああ。いいみたいだ」

なんだか、急に胸が熱くなって、気が付くと、俺とキヨカは泣いていた。

「おいおい、どうしたんだ？」

「もしかして、祭り上げて欲しかったのか？ だったら、今からでもパーティーするか？」

「そうだ。目覚めた祝いをするか」

「ほれ、酒と料理だ。用意しようぜ」

どこまでも温かい人たちだ。

こんな風にしてくれるなんて……。

こんな、奇妙な俺たちを、普通に迎えてくれている。

「ありがとうございます」

なんと言っても足りない。

ずっと言い続けないと足りない。

「おいおい、泣くなよ」

「そうよ。あなたたちはすごい事をしたんでしょ」

「そうそう。よくわからんけどさ、すごかったじゃんか」

「なあ、あれってなんだったんだ？」

「そうそう。おれも気になってたんだよな」

「ちょっと、やめなさいよ」

「そうだぞ。話せない事かもしれないだろ」

「……すまん」

完全に置いてけぼりだな。

でも、話せないのは事実だった。

信じてもらえるとかそういうのじゃなくて、あまり話さない方がいい気がする。別に口止めされてるわけじゃないけど、これ以上は巻き込めない。

「ほら、困ってるじゃない」

「本当にすまん。別に、無理に話さなくてもいいんだぞ」

「そうそう。ちょっと悪ノリしただけだ。気にするな」

どうする？

そんな気持ちでキヨカを見る。

どうやらそれが通じたのか、キヨカは頷いた。

このまま、なんの説明もなしなのは、これだけ心配してくれた人たちに失礼だよな。

「すみません。詳しくは話せないんですけど、俺たちの旅の目的っていうのが、ああいうのを封印する事なんです」

このくらいなら大丈夫だろう。

「おおっ、すげえな。なんだ、すげえ旅をしてるんじゃないか」

「あんなのって、他にもいるって事？」

「っていうか、あれってなに？」

矢(や)継(つ)ぎ早(はや)に訊かれる。

「……えっ、あの……。えっと……」

「トールちゃん、どうしよう？」

「そうだな……。あのですね。あれについては、すみません、なにも言えません。ただ、この世界には、もういないと思います」

「そうなんだ」

「もういないのか。だったら、よかった……」

「っていうか、それなら旅は終わり？」

「そうだよな。もういないんだろ？」

うっ……。

言い方が悪かったのか。でも、この世界にまだいるなんて、不安にさせるようなもんだし、こういう言い方になるよな。

「えっと……その辺はですね……」

どう答えたらいいんだろうか。

答えに困っていると、

「ほら、その辺にしましよ。いいじゃない。二人はこうして無事だった。それでいいでしょ」

西部雅子さんが場を静める。

「……そうだな」

「そうね。ごめんなさいね」

「悪かったな。疲れてるよな」

「俺たちも、仕事しないとな」

「安心したら、調子にのっちゃったみたいだな」

「さて、大人しくしときましようか」

と、みんなが仕事に戻っていく。

「ごめんなさいね。悪気はなかったんだけど……」

「いえ」

そんなのはわかっている。

悪気なんてあるはずないし、俺たちも嬉しかった。

こんなに普通に接してくれるなんて、考えもしなかったんだから。

「こんな風に、普通に接してくれて、嬉しかったです」

「私も。あんな事しちゃったから、気味悪く思われるかもって……」

「どうして？」

俺たちの言葉に、西部雅子さんは本当に不思議そうに首を傾げる。

「だって、あんな化け物みたいなのと……」

「そんなのどうでもいいじゃない。あなたたちは、あの化け物から、この街を救ったんでしょ？」

「だったら、胸を張っていなさいよ。悪い事なんてしてないんだから」

そう言われると、なにも言えなかった。

確かに悪事を働いたわけじゃない。でも、どこか後ろめたいものがあった。それがなんなのかはわからないけど、普通じゃないってのが、そうなんだろう。

そのせいで、どうしても後ろ向きというか、卑屈になってしまっている。

「ありがとうございます」

「お礼なんて言うような事じゃないでしょ」

「それでも、やっぱり……」

こんな風に受け入れてもらえるのは、やっぱり嬉しい。

「まあ、それならそれでもいいけどね」

これ以上、押し問答するわけにもいかないし、と西部雅子さんが微笑む。

「トールちゃん」

「ん？」

不意にキヨカが耳打ちしてくる。

「ちゃんと話そうよ」

「……………」

すぐには答えられなかった。

確かに、話しても支障はないかもしれない。俺たちは、別の世界の人間だし、その情報を知ってもこの世界には影響はないだろう。それよりも、この世界にないものを持ち込んだ方が、影響は大きいはずだ。

それを考えれば、俺たちは重犯罪を犯しているようなもんだし、このくらいなら微々たるものだろう。

「そうだな。話そうか」

「うん、そうしよう」

お世話になった恩を、こんな事で返せるんて思わないけど、なにかせすにはいられない。こんな事しかできない。

「俺たちの事、全部は無理かもしれないですけど、聞いてもらってもいいですか？」

ごくりと唾を飲み込んでから口を開く。

「無理しなくていいのよ。理由はあるだろし」

「いえ、いいんです。俺たちが、話しておきたいんです。ただ、どれだけ信用してもらえるかわ

かりませんけど……」

話しても、こんな荒唐無稽な事なんて、普通なら信用できるもんじゃない。

作り話と思われて当然だ。

「信じるわ。どんな内容でも」

それでも、西部雅子さんは真っ直ぐに俺たちを見る。その目は、嘘を言っているそれじゃなかった。

「キヨカ、いいな」

「うん。話そう」

俺たちは最後に確認する。

「じゃあ……。俺たちは――」

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

俺たちは、旅の目的、俺たちの使命……そんな事を順を追って話す。

夢物語のような話を、西部雅子さんは茶化す事なく、最後まで真剣に聞いてくれた。

「……なるほど。大変な事してるのね。それにしても、別の世界から来たっていうのは、夢みたいね」

でも、本当なんです。そういいかけたが、

「でも、私たちが知らなかったものを色々知っていた。だから、嘘じゃないんでしょうね。思い返せば、私が訊いた時、どこか言いづらそうにしていたもんね」

やっぱり伝わってるんだな。まあ、隠そうってのは考えもしなかったけど。

「他の世界ってあるんだね……。あなたたちの世界って、こういうのが当たり前存在するんだよね」

「そうですね。日常にあって、もちろん人気があります」

「なるほど……。じゃあ、やっぱり正解だったかも。世界は違っても、人ってそんなに変わらないと思うの。実際、あなたたちから見て、私たちってどう？」

「それは……」

どう答えていいのかわからず、キヨカを見る。

キヨカは、仕方ないな……とぼやきつつ、

「あまり変わらないと思いました。ただ、なんだか活気があるというか、元気っていうか……明るいなって思いました。それと、ぶっちゃけお金持ちかもって」

あけすけすぎだろ。でも、俺もそう思ったもんな。

みんな、羽振りがいいというか、金銭感覚がおかしいんじゃないかってくらいの使い方をしてる気がする。一緒に仕事をしていたみんなも、今日は何一〇万使っちゃったよとか、今日は何万で足りたとか、そういう会話を何度も聞いていた。

学生の俺にすれば、万単位なんて考えられない。それは多分だけど、普通のサラリーマンでもそれはないだろう。仕事にもよるだろうけど、この仕事が特に儲かっているというわけでもなさそう。それは、夜の街には大勢の人たちが、年齢関係なく集まっていた。

やっぱり、この世界は娑婆羅なんだろうな。

俺たちの世界とは、全然違うわけだ。

「お金持ちか……。確かに景気はいいけど、特にお金持ちってわけじゃないわよ。このくらいは、普通になるかな」

「そうなんですかっ！」

キヨカが大袈裟じゃないかってくらいに驚くが、俺も同じように驚いている。

「あなたたちの世界はそうじゃないの？」

「そうですよ。不景気不景気って言われ続けてますよ。私が生まれる前は、景気がよかった時代があったみたいですけど、バブルが崩壊してから、ずっと不景気です」

「バブル……？」

聞き慣れない言葉だったんだろう、西部雅子さんが首を傾げる。

「えっと……景気がよかった頃を、そう呼んでるんです」

「ふうん、そうなんだ」

なんだか不思議な名前だね……と呟きながらも、頷いている。

それから、色々と話題は尽きないし、色々と名残惜しいが、これ以上、長居するわけにはいかない。

「すみませんが、そういうわけで、俺たちは次の世界に行かないといけないんです」

「もうちょっと、いられないの？」

「ごめんなさい。私たちは、早く行かないと、他の世界が……」

「そうよね。……でも、残念だわ。もっと、教えて欲しい事があったもの」

「俺たちだって、今の仕事を見届けられないのは残念です。でも、俺たちには、しないといけない事があって……」

「うん、わかってるわ。ごめんなさいね。これ以上言ったら、あなたたちが行けなくなっちゃうわね」

西部雅子さんが笑顔で言ってくれる。その笑顔は、どこか無理をしているようにも見えた。

「ありがとうございます」

「それじゃ、私たちはすぐにでも行きます」

荷物は元々まとめてあるので、荷造りは必要ないだろう。すぐにでも出発できる。

「わかったわ。それじゃ、今日までのお給料を精算するわね」

と、西部雅子さんは部屋を出ていく。

「どうする？」

キヨカが訊いてくる。

「なにがだ？」

「お金だよ。もらっちゃっていいのかな？」

意外だった。っていうか、俺は考えもしなかった。

「そうだな……」

もらわない選択もあるだろう。でも、この先も、こんな日数を費やすなら、旅費は必要になるだろう。荷物にあるスパイスを売っても、どれくらいになるかわからない。

「やっぱり、遠慮する？」

「それは……そうだな、貰おう」

「うっわあ。意外だよ。トールちゃんだったら、絶対貰わないとか言いそうだったのに」

「なんだよ。俺だってそう思ったけど、この先を考えたら、必要かもしれないだろ」

「そうだね。やっぱり必要だよ。トールちゃんも、そういう考えするだね」

にぱにぱと笑いながら、背中をバンバンと叩いてくる。

「痛いからやめろって」

そんな風にじゃれていると、封筒を持って西部雅子さんが戻ってきた。

「確認してね」

と、俺たちに封筒を渡す。

「なっ……」

渡された封筒は、かなりの厚みがあった。

「一日分。一人日給二万円で四四万円ね」

さらりとそんな事を言われても……。

そんな大金、なかなか手にする事はないぞ。

っていうか、普通に働いていても、こんなにもらえるなんて……。既に、バイトの域を逸脱している。

俺が戸惑っている間に、キヨカが平然と数えている。

「確かにありました」

「じゃあ、サインをちょうだいね」

キヨカと西部雅子さんが、当たり前のようにこなしていく。

「ありがとうございました」

「こちらこそ。色々とアイデアをもらったわ。これで、これからも頑張っていけそうだし」

これで、ここでの事は全て終わった事になるんだな。なんだか、名残惜しい。

でも、俺たちの旅はまだまだこれからだ。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

そう言うと、キヨカはゆっくりと目を閉じる。すると、目の前に真っ黒い穴が現れる。『時の口』だ。

やっば、ここからか。そうだよな。だって、別の場所から行く理由がないもんね。きっと……っていうか、絶対に西部雅子さんは驚くだろうし、それと同時に俺たちの話も全部が本当だと信じてくれるだろう。

「アーちゃん、お願いね」

了解した、

蜘蛛(アラネーオ)に協力を頼む。蜘蛛(アラネーオ)の力がないと、蟲(ベステート)がいる世界に確実に行く事ができない。

「じゃあ、俺たちはこれで。色々とお世話になりました」

そう言って、深々と頭を下げる。

「私も楽しかったです。ありがとうございました」

キヨカも隣で頭を下げている。

「そんな……。こっちこそ、色々とお助かったわ。じゃあ、下まで見送りさせて」

「いえ、ここで結構です。他のみなさんには、よろしく伝えてください」

「えっ？ でも……」

「キヨカ、まだ大丈夫だよな」

「うん、しばらくはなくならないと思うけど……」

「そっか。じゃあ、みんなも呼ぶか」

「トールちゃん、それって……」

まあ、俺たちの説明なしってのは驚かせるだけだろうし、あまり大勢の人に俺たちの事を知られるのはよくないかもしれない。

でも、俺としては、このまま旅立つのは申し訳ない気がした。

色々と親切にしてもらい、まるで家族のように接してくれた人たちだ。それなのに、挨拶もなしってのは、淋しいだろ。

「……しょうがないな。やっぱり、トールちゃんはトールちゃんだね」

キヨカは苦笑いしながらも、本心は俺と同じ考えだったはずだ。

「仕事を中断させちゃいますけど、みんなを呼んでいただけますか？」

まあ、隣の部屋なんだけどな。

「ええ。……みんな、ちょっと中断して、集まってくれるかしら」

西部雅子さんが隣の部屋に向かって呼び掛ける。

その声に応じて、わらわらとみんなが集まってくる。

「どうしたんだ？」

「雅ちゃん、どうしたの？」

「なにかあった？」

集まってきたみんなは、俺たちが出掛ける準備をしているのを見て、どういう事なのか理解してくれる。

「おっ、もう出掛けるのか？」

「旅の途中だって言ってたけど、もうちょっといられないの？」

「せっかくだし、もう少しだけいろよ」

「そうだぞ。これが完成するまでいればいいじゃないか」

「そうそう。あなたたちの発案なんでしょ？ だったら、最後まで見届けなさいよ」

「俺たちの手柄になってもいいのか？」

「そうだぞ。こんないいアイデア、みすみす俺たちに渡してもいいのか？」

「だよなあ。やっぱ自分たちの功績は、自分たちのものにしないと」

などなど、嬉しい事を言ってくれるが、俺たちはそれに応える事ができない。

「ありがとうございます。でも、私たちはもう行かないと……」

「みんな、ここはきちんと見送ってあげましょう」

「そうだけどな……。やっぱり残念だろ」

「もう……。今、ちゃんと見送ろうって言われたのに……」

「そんな事言って、そっちこそ、行かないでって思ってるだろ？」

「そうだけど……」

やっぱり、ここの人たちは温かい。

ずっとここにいたくなる。

世界が違わなければ、時間が違わなければ、使命がなければ、俺たちは、ここにいたいと思う

。

「ありがとうございます」

何度でも言い足りない。

でも、ここで躊躇したら旅立てなくなる。

「キヨカ、行こうか」

「うん、そうだね。今度こそ行こう」

「「みなさん、ありがとうございました」」

俺たちは同時にお礼を言って、一步を踏み出す。

その行動に、みんなは驚いているようだった。

でも、このまま旅立つしかない。

俺たちは、ゆっくりと『時の口』に入った。

「えっ？ なにっ？」

「なんだ？ 俺は夢でも見てるのか？」

「まさか幽霊……って事はないよな」

「どうなってるんだ？ 手品？」

「なあ、雅ちゃん……」

「本当に……。すごい……」

「おいおい、なにかの悪い夢か？」

「わたしたち、どうかしちゃった？」

「なんだよ、これ。あいつら、何者なんだよ」

残された人たちは、目の前の光景が信じられず、ただただ驚いていた。

そして、二人が旅立ってから、しばらくはその場に立ち尽くしていた。

その夜も、狐につままれたような雰囲気、懐かしむように盛り上がっていた。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて 一婆娑羅一 ㊦

<http://p.booklog.jp/book/48947>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48947>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48947>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.